十字架を背負う

伊東椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十字架を背負う

【Nコード】
N5282J

【作者名】
伊東椋

【あらすじ】
海上自衛隊所属の護衛艦『あたご』と漁船『清徳丸』の衝突事故。漁船側乗組員二名の行方不明者を出した悲劇は世間を騒がせた。自衛隊側に責任が追及され、死者が出た、ただ悲しいだけの事件。何故このような事が起こったのか、何故このような事が回避できなかったのか、事故発生に関する調査に綴って、そして十字架を背負う事となった“彼女”の記憶を辿って、事件の内幕が明かされる――
―

護衛艦あたご漁船清徳丸衝突事件（前書き）

護衛艦『あたご』と漁船『清徳丸』が衝突した海難事故。“護衛艦あたご漁船清徳丸衝突事件”

あの事故からもうすぐ二年になります。

それは忘れてはならない出来事であります。尊い人命が失った事故があったということ、このような海難事故があったこと、そしてそれが何故起こったのか、将来またこのような事故が起こらないことが大切だと思います。

防衛省・自衛隊・海難審判所・海上保安庁等の事故調査を元に、執筆に励みたいと思います。

護衛艦あたご漁船清徳丸衝突事件

二〇〇八（平成二〇）年二月十九日、一つの悲劇が起こった。

千葉県の野島崎沖で海上自衛隊のイージス艦と漁船が衝突した海難事故が発生。漁船側の乗組員二名が行方不明（後に認定死亡）となった。

この海難事故はこれまでの海難事故とは違った感覚で世間を騒がせ、日本の海難事故史上においても、自衛隊においても、印象深く残る事故となった。

事故の当事者となる船舶の内、漁船と衝突したイージス艦の名前はおそらく日本国民の中で唯一色濃く記憶された名前となっただろう。

そのイージス艦の艦名は、『あたご』

そして乗組員二名が死亡し、船体を真っ二つにされて冷たい海に沈んだ漁船の名は『清徳丸（せいとくまる）』

海難審判（海難審判法に基づき、海難を発生させた者に対して懲戒を決めるために海難審判所が行う審判）での事件名は、“護衛艦あたご漁船清徳丸衝突事件”

何故、事故は起きたのか。何故、このような事態に至ってしまったのか。海難審判による現場検証や乗員への事情聴取等の調査をしても、本当の真実は誰にもわからない。最も当時を知る者は、死者は、何も語れないのだから――――

そして、十字架を背負いし“彼女”も――――――――

第一幕　“愛宕（あたご）”という名の少女（前書き）

これは艦魂作品でもあるので、艦魂という設定部分の風景も描かれます。予定では今回と二話までいつものノリみたいな感じで艦魂たちの日常が描かれますが、三話から本作の真髄である衝突事故が書かれます。

ではどうぞ。

第一幕 “愛宕（あたご）”という名の少女

二〇〇七（平成一九）年三月十五日木曜日。一隻の護衛艦が新たに日本の海上自衛隊内で就役した。
日本の五隻目のイージス艦として就役した護衛艦の名前は『あたご』だった。
三菱重工業長崎造船所で起工、進水し、そして遂に就役に至った。因みにこの造船所は旧海軍の戦艦『武蔵』が建造されたという歴史があり、現存するイージス艦『こんごう』『みょうこう』『きりしま』も同じ造船所出身である。
『あたご』は第三護衛隊群第六三護衛隊所属として舞鶴にいた。戦前から伝統的な軍港として栄えた舞鶴には、日本の国防の要となるイージス艦が二隻配備されることとなった。『あたご』はその二隻目となり、五隻目のイージス艦として誕生した『あたご』の舞鶴配備は海自内においては歓迎される出来事だった。

まるで要塞と言わんばかりに基地として栄えている舞鶴港の一角は海上自衛隊の有名な舞鶴基地だ。その岸壁には様々な自衛艦が繋留されており、港町の住民には見慣れた光景だった。
「あーちゃん、あーちゃん」
「みょうこう姉さん。そのあーちゃんって呼び方やっぱりやめてくれませんか？」
岸壁に仲良く並んで繋留するのは二隻のイージス艦、『あたご』と『みょうこう』。そしてその『あたご』の艦上には二人の少女が仲良くくっ付いている……というよりは、片方が一方的に抱きついているだけのようにも見える。
「え〜。良いじゃない、可愛くて」
「恥ずかしいんですよ……」
そう言って頬をほのかに朱色に染めている少女は、『あたご』の

艦魂だ。『みょうこう』の艦魂に抱きつかれる中で頬を染める姿は確かに可愛らしい。短く縛ったポニーテールに黄色いリボンが特徴的で、もう一人よりやや小柄な体型だった。しかし出る所は出ていて、整った顔立ちをしている美少女だった。

そしてもう一方の少女は、二〇代そこそこと言った外見年齢で、あたごと一緒にいるとお姉さんという感じがする。被る制帽から流れるクセのある長髪。左目の下には泣きホクロがちょんと浮かんでいた。『あたご』と負けらず美少女と言えるが、彼女には『あたご』にはまだ足りない大人っぽさという雰囲気があった。

しかし実際には『あたご』より子供っぽい所がある。こうして『あたご』に後ろから抱きついて頬をスリスリさせてる光景なども一例である。

「恥ずかしいことなんて何もないわ。　例え恥ずかしいとしてもそのうち慣れるわよ」

「あだ名も恥ずかしいですが、抱きつくのもやめてください」

「酷いわッ！　あーちゃんと呼ぶのも駄目、抱きつくのも駄目。姉妹の契りを交わした人にそんなことが言えるなんてッ！　姉妹の意味がないじゃないッ！」

姉妹の契りと言っても、これもまた提案したというか、言いだしたのはみょうこうの方である。あたごが就役して舞鶴に配備された時、特に大歓迎したのがみょうこうだった。自分と同じイージス艦の後輩が来てくれたというか、まるで妹が出来たような喜びようだった。

実際、みょうこうは実の姉のようにあたごを慕い、可愛がっている。次第にみょうこうはあたごと姉妹のような関係を望み、あたごに自分のことを姉さんと呼ばせた。

実を言うとあたごもそれは全然悪い気がしなかった。むしろみょうこうが姉妹になろうと言いだした時は驚きも大きかったが、嬉しさもあった。

自分が初めて来た時からずっと可愛がってくれていたし、あたご

もみょうこうのことを姉として慕うようになっていたからだ。
　こうしてあたごとみょうこうは姉妹の契りを交わしたのだが、それ以降、みょうこうのあたごへの愛着は日に日に増していくばかりだった。
「あーちゃんとも呼べず、抱きつくこともできなかったら、私は妹分が不足して死んでしまうわッ！」
「…なに、それ」
「姉はみんな持ってるのよ。妹分が不足すると、姉は萎びてしまうの。不足してしまうと、姉は妹にスキンシップをすることで妹分を補充するのよ」
　絶対嘘だ。
「妹分がないと、お姉ちゃんは死んでしまうわ……」
はた迷惑で、気持ち悪い栄養分である。
「今、とても酷いことを考えなかった？」
「気のせいですよ、みょうこう姉さん」
　変な所で勘が鋭いのがみょうこう姉さんなのだ。
「───ということで、妹分を今から補充するわ。さっきあーちゃんに酷いこと言われたからさらに妹分が減っちゃったから、もっとすごいことをするわ」
「今さらりと聞き捨てならないことを聞いた気がするよ。なおさら拒否反応を示させていただきます」
　そう言うと、あたごは両手を前に出してNO！と示した。次の瞬間、みょうこうはものすごいスピードでグタリと倒れた。
「え…ッ！　本当に萎びてるッ！！？」
　倒れたみょうこうの両目からシクシクと涙がものすごい量で流れ、池がみるみる広がっている。それがみょうこうの水分であると表すように、みょうこうの身体も萎びれていった。
「ちょっと姉さんッ！　しっかりしてくださいッ！」
「妹妹妹妹妹イモモモモモモガガガガガ」
「姉さ─────んッ！！？」

いかん、これは重症だとあたごは気付いた。池が広がるにつれてどんどん萎びていくみょうこうを前にして、あたごは一生懸命考えた。そして最善の方法を見つけた時、あたごは恥ずかしさによって顔を赤くした。

「……仕方ないですね」

諦めたように、ハァと溜息を吐くあたご。そして今度は魂が抜けていくのではないかと心配するほど萎びるみょうこうを見据えて、あたごの唇がそっとみょうこうの耳元に近づいた。

一息置いて、顔を赤くしたあたごが囁く。

「────お姉ちゃん、大好き…」

「ふっかああああああああああああっッッッッッ！！！！！」

バネのように飛び上がったみょうこうを前に、あたごは真っ赤にした顔を俯かせていた。

「今ので妹分が九九パーセント補充されたッ！　あと二〇〇パーセント補充するためにあーちゃんを抱き締めるッ！！」

「色々おかしいですよ姉さ…！！　きゃああああッ！！」

あたごはあっけなくみょうこうに襲われ、蹂躙された。あたごはジタバタと抵抗するが、人の動きを完璧に止める方法を何故か熟知しているみょうこうの技の前では無力だった。

「こぉら、そんなゴールデンから放送できないようなことは深夜の二時くらいにやりなさい」

桜のように華やかな通る声の持ち主は、はるな型護衛艦一番艦『はるな』の艦魂だった。彼女は第三護衛隊群の直轄艦で、第三群の中でも最古参であった。既に退役を待つ身であるが、建造計画当初から艦隊旗艦としての役割をさせるために就役したので、艦の司令部としての設備同様、彼女自身も旗艦として申し分ない才覚を今でも有している。

おしとやかで、気品が溢れる才色兼備な女性とは彼女の事。外見年齢は二十代後半で、みょうこうよりさらに大人な雰囲気が漂う。

「スキンシップよ」

あくまでそれを言い張るみょうこう。
その下で服を乱され、涙目になっているあたごをチラと見たはるなは、ふぅ…と溜息を吐いた。
「可愛がるのは良いけど、程々にしなさいよ。　せめて秩序を崩さない程度にお願いね」
「少しくらいオーバーな方が丁度良いから、これで良いのよ」
「あなたのは少しくらいじゃないのよ」
結局、はるなの説得によってみょうこうは渋々あたごを解放した。
乱れた服を戻すあたごに、はるなが声を優しくかけた。
「許してあげてね。　みょうこうはあれでも昔から良い子だから。ただ、表現の仕方がちょっと下手なだけなの」
「…はい。　大丈夫です。　私もそれだけはちゃんと知ってますから」
「そう」
あたごの言葉に、はるなは微笑んで頷いた。二人は、後ろの方でちょっとスネているみょうこうの方を見た。唇を尖らせているみょうこうを見て、顔を見合わせた二人は、それぞれ溜息と微笑を漏らした。
「ねえ……ッ」
みょうこうが何か言いかけたが、戸惑ったように口を閉ざした。あたごにいつもの呼び名を呼んで良いか困っているのだ。余程だったのだろう。あたごにはやっぱり嫌がることはできないと思ったのか。だが、それだけみょうこうがあたごを大事に思っている証拠でもあった。
「仕方ないですね」
「え…？」
「あーちゃんって呼んでも構いませんよ。　みょうこう姉さん」
ニコリと微笑んだあたごが言った言葉に、みょうこうは目をぱちくりさせた。そして言葉の意味を捉えるとふるふると涙目で震えだし、瞬間的な速さであたごに抱きついた。

「あーちゃぁぁぁぁぁぁん」
「姉さん……」
あたごの胸に飛び込むみょうこう。それを宥めるあたご。どちらが姉かわからない絵だった。それを微笑ましく見詰めるはるな。
「妹分補充ぅぅぅぅぅぅ」
「懲りてませんねッッ！！？」
あたごの胸に顔を寄せて離さないみょうこうに、あたごはまた苦戦するのだった。はるなは最早呆れたように溜息を吐いて、だがそんな姉妹のやり取りをいつまでもそばで微笑ましく見学していた。

そんな楽しい日々が、微笑ましい日々が、それからも続いていた。最新鋭のイージス艦としても期待され、演習や航海の時も順調で、特に変化が見られない日常だった。みょうこうをはじめとした艦魂たちとの交流も、より深く、そして永遠のように続いていった。
そんな日常が突然崩れさるなんて思いもしなかった。期待されていたものが、周囲の見るものや、特に自分自身が、これから先劇的に変わるものだとは特に予想していなかった。
少なくとも、あの時までは――――

第一幕 “愛宕（あたご）” という名の少女（後書き）

あたごとみょうこう。この二人の関係は神龍と榛名に似ているかも。
わからない人は気にしないでください。

次回もこんな調子ですが、ご了承ください。
三話からこの作品の真髄を書きます。
次回は明日投稿します～。再乗船日まであまり時間ないので、なんとか出来るだけ書きたいと思っているので……
あとここでお伝えしますが、この海難事故を通じて私の経験や知識、船舶での常識や法律等も書いてみたいと思います。上手く書けるかどうかまだわかりませんが、自分なりに頑張って書きますのでよろしくお願いいします。

第二幕　最新鋭艦の日常（前書き）

『あたご』は当時日本の五番目のイージス艦であり、事件発生の時はまだ就役して一年しか経っていない時でした。
最新鋭のイージス艦として期待され、就役以降の最初の時期は乗員の艦に慣らすための訓練やシステムの導入や試験等でやはり色々と忙しかったようです。
そんな忙しいあたごの日常。

第二幕　最新鋭艦の日常

『あたご』が就役した同じ春の内に、乗員が自艦に慣熟するため、機器の操法等を中心とする慣熟訓練を実施した。同年五月から六月の間は、主として佐世保港及び同周辺海域においてイージスシステムのプログラムインストールを行うとともに、同プログラムの作動試験及び総合試験を停泊、航海に分けて実施し、同年五月下旬には横須賀港及び同周辺海域において装備機器の作動試験を実施した。

続いて同年七月二日から八月九日の間、舞鶴港及び若狭湾において、舞鶴のＦＴＧ（海上訓練指導隊）の指導の下、各種部署訓練等を中心とする就役訓練を実施した。

真夏の太陽が強く煌めく舞鶴基地に帰ってきた『あたご』は、『みょうこう』が繋留する対岸に繋留を開始した。入港部署の配置についたクルーたちがロープを岸壁の上と繋げ、繋留作業を行った。

艦が繋留し、ようやく落ち着いた頃には既に日は落ちていた。残りの予定も終え、消灯時刻が過ぎて当直以外のクルーが眠りについて静かになった頃、赤い光だけが照らす薄暗い艦内で、一人の少女がタオルを持ってシャワー室に向かっていた。

「お疲れ、あーちゃん。　なんだか大変ねぇ」

「あ、みょうこう姉さん……」

赤い光だけで薄暗い艦内だから、突然現れたみょうこうに内心少しビクッとなってしまったあたごだったが、表面に出すことは防ぐことができた。

「久しぶりねぇ。　お姉ちゃん会いたかったわぁ」

そう言うみょうこうは本当に嬉しそうだった。普段から素直すぎる姉に、あたごは苦笑した。

「ここの所忙しかったから……」

「そうね。　あーちゃんが最近舞鶴にいないものだったから、お姉ちゃん寂しかったわ」

「……ごめんね、姉さん」
「謝らなくて良いわよ。　だって仕方ないものね」
就役したばかりの護衛艦として、しかも最新鋭のイージス艦だ。就役したばかりの最初はやはり色々やることが多いのはみょうこうも承知だった。
「どこか行くの？」
みょうこうはあたごが手に持っているタオルを見て、尋ねる。
「うん…ちょっと疲れたからシャワーでも浴びようかと……」
艦魂は別にお風呂やシャワーを浴びなくても身体が汚れるわけがないのだが、食べる時と同じで、そこは艦魂それぞれの趣味というか、自由である。それにシャワーの場合身体を清める以外でも、疲労から身を癒す役割を果たす。
「あ……」
あたごはしまったとばかりに口をタオルを持っていない方の手で覆った。こんなことを言ったら、「じゃあ私もあーちゃんと入るわ」と、みょうこうなら言いかねないとあたごは今更になって気付いたのだ。
おそるおそるみょうこうの方を見るあたごだったが、反応は予想外のものだった。
「そっ。　それじゃ、行ってらっしゃい」
あれ…？
さらりとスルーされた。あたごは拍子抜けしたみたいな顔を浮かべる。みょうこうはそんなあたごに首を傾げた。
「どうかした？」
「——いや…ッ！　あ、うん！　すみません、なんでもありません！」
「？　そう？」
あたごは自分の考えすぎであることを恥じた。そして姉を信用していない自分がいたことに気付いて少し自分に絶望した。もう一度、心の中で姉に謝ると、あたごはみょうこうと別れてシャワー室に向

かった。
だが、あたごが去る間際、みょうこうが掛けた言葉――
「ゆっくり入ってきなさい」
何故か、その言葉が妙にひっかかるあたごだった。
だが正直言って疲労の方が強かったことで、そんな疑問はすぐに消え失せた。早くシャワーを浴びて寝たいという欲求に従い、あたごは早足でシャワー室へと向かった。

立て続けに装備機器の試験や訓練等を実施した『あたご』にとっては一段落した感じだった。そして彼女にとっても今の時間はようやく訪れた束の間の安らぎだ。
「ふぅ……」
露になった肢体に当たるシャワーの湯。暖かい感触が体中に染み込み、疲れを溶かしていく。雫が彼女の艶やかな肌を伝い、ほのかに帯びるその肌を白い蒸気が微かに隠す。
ほとんどの者が眠りについた時間帯を見計らって、あたごは最近よくシャワーを浴びるようになっていた。ここ最近続く多忙な生活に対して、身体を癒したくなるのは当然だった。シャワーというのは疲労を溶かすのにもってこいの手段だった。
実際、クルーたちが普段使っているシャワー室なのだから、彼女が使うといったらクルーがいない時でなければいけないのは色々な意味で当たり前である。だから消灯時間の後にシャワーを浴びることにしている。
あたごは顎を上げ、正面からシャワーの雨を浴びていた。降り注ぐお湯を受け止めながら、あたごはこれからのスケジュールを頭の中で思い浮かべる。
今日までに一ヶ月続いた就役訓練も終わり、これからの先も色々とやらねばならないことが山積みになっていることだろう。
「…………」
これからも大変だな、と思いつつも、これしきで弱音を吐いては

いけないとあたごは思った。国防の要として重要な存在である自衛艦としての自覚。

きゅっと閉めて、シャワーの湯を止める。濡れた髪の端から滴る雫が落ちるのを視界に入れながら、あたごは少しの間だけ静寂に身を委ねた。

「……」

あたごは今日まで続いた一ヶ月の就役訓練を思い出していた。

就役訓練では、FTGの指導の下で基本的な部署（各種任務を遂行するための艦内の態勢。一般船舶でも部署は存在する。入港部署・出港部署等。自衛艦の場合は戦闘部署等もある）の訓練を実施し、指導期間の最後に行われた舞鶴FTG司令による訓練成績審査での評価は“抜群”“優良”“良好”“可”及び“不可”の区分のうち、霧中航行が“良好”である他は“優良”という結果だった。

続いて隊司令による訓練査閲では、基本的な部署及び行船法（艦船の運航に関して採るべき措置・手順等）の評価を実施し、基本的な部署については“優良”で、行船法は“良好”と判定され、隊司令がSQT（同年一〇月に予定しているアメリカでの装備認定試験）終了後に予定している戦闘部署に関する事項を除き、護衛艦として所要の練度にあることを確認し、総合判定を合格とした。

合格というほっとする判定を貰うことができたが、それだけで終わらなかった。

基本的な部署及び行船法の細部所見においては、更なる技能向上のための改善事項として、当直士官については入港作業時に視界が不良となった際の見張りへの指示及びCIC（戦闘指揮所）の活用不十分並びに霧中航行時の目標の確認不足、対処要領不適切等が指摘された。

CICについては霧中航行時に注意すべき目標の警戒不十分、行船意図（当直士官の自艦運航に関する措置方針等）の把握の不十分等が指摘されていた。

見張りやそれに関する情報伝達等は自衛艦関係なく船舶の世界で

は共通する常識であり、同時に特に重要すべき事項だ。

あたごはその事に溜息を出したい気分だったが、これからも頑張らなければという気持ちがより強くなった。

訓練査閲後、艦長が隊司令からこれらの指摘事項の詳細の説明を受け、改善を指示されていた。

シャワーを浴び終え、身を癒すと共に気持ちを新たに切り替えたあたごはタオルを身体に巻きつけ、シャワー室を出ようと扉を開けた。

「……あ」

扉を開けると、目の前にみょうこうが洗面具が満載したカゴを脇に抱えた状態で立っていた。身体にタオルを巻きつけたあたごはその場で目を丸くした。

「…………」

「…………」

お互いに黙って見合うその状態が数秒続いたが、みょうこうがあたごの今の姿を下から上まで見通すと、「…チッ」と舌打ちした。
その瞬間、あたごはバタン！と扉を閉めた。

閉じた扉に背を預け、あたごは思う。

おそらくみょうこうは途中からシャワーに加わろうとしていたのだろう。だが既にシャワーを浴び終わっていたことを確認して、舌打ちをして見せた。

――危なかった、あと数分シャワーを浴びていたら襲われていたのかもしれない……

そんなもう一つの未来を想像して、あたごは嫌な悪寒を感じた。
背を預ける扉からはみょうこうの甘い声が聞こえる。

「あ〜ちゃ〜ん、ここ開けて〜。　今度はお姉ちゃんと入りましょう〜〜」

「私はもう入りましたからッ！　姉さんが私の次に一人で入ってくださいッ！」

「それじゃあ意味ないのッ！　妹分を補充す…じゃなくて、あー

ちゃんを犯し…じゃなくて、あーちゃんの疲れを癒してあげた……じゃなくて、私はあーちゃんのすべてを舐めまわしたいのよッッ！！」

「結局そこじゃないですかぁぁぁッッ！！！」

必死に閉じた扉を抑え、悲鳴に近い声で叫ぶバスタオル一枚姿のあたご。そんなあたごを捕食せんとみょうこうが扉一枚越しから荒い息を吐く。

「だ、駄目…ッ　しばらくあーちゃんに会えなかったから私の妹分がぁ……ッ！」

それが理由らしい。

この状態で襲われたら洒落にならないと、あたごはその場から瞬間移動で逃げることを考えた。だが今は閉じた扉を抑えるのに必死で、それは難しい。

「…………」

「……？」

と、その時。ぴたりとやんだ雰囲気に、あたごは怪訝に思った。シーンとした静寂に、あたごは妙な違和感を感じた。

「姉さん……？」

おそるおそる扉を開けると、そこには悲しそうな心配しているような、様々な感情を渦巻いた複雑な表情をしたみょうこうが立っていた。

まるでまたやってしまったと言わんばかりにしょぼくれて、親の叱りを想像している子供のような表情だった。

「……あーちゃん」

「姉さん…？」

その時、みょうこうはふっと優しい表情を浮かべた。

「ごめんね、またやっちゃった。　あーちゃん、疲れてるのに……私、つい同じようなことを…」

「姉さん……」

優しくも、どこか少し悲しそうな笑顔を浮かべるみょうこう。

みょうこうも本当にあたごの事が気にかかって仕方がなかったのだ。しばらく会えなかった間も寂しかったし、やっと会えた時はまたいつものように、いやそれ以上に彼女に接したかったのだ。
疲れているだろうから休ませてあげようという気持ちも勿論ある。だが、彼女もまた寂しかったのだ。
あたごはそれを理解して、自分を呪った。大好きな姉にこんなに心配をかけている自分に。
「……いいんですよ、姉さん。　私、姉さんと久しぶりに会えて、嬉しかったですから」
その言葉に、みょうこうはえっと驚いた表情になって顔を上げた。
「ほ、本当に……？」
「はいっ」
嘘ではないと言うように、満面な笑顔で頷くあたご。
そんな嘘偽りない本音の笑顔を見たみょうこうは、うるっと涙腺を緩ませ、同時にほわぁっと嬉しそうな表情になった。
「あーちゃん。　おかえりなさいっ」
「ただいま、みょうこう姉さん」
笑顔を浮かべ合う二人の姉妹。実の姉妹でなくても、その光景は再会を分かち合う仲の良い姉と妹の絵であることは間違いなかった。

第二幕　最新鋭艦の日常（後書き）

二話まではあたごとみょうこうの姉妹の仲を書きましたが……

早くも次回から本作の真髄である事件に入っていきます。

第三幕　漆黒の海で起きた悲劇（前書き）

今回は護衛艦『あたご』と漁船『清徳丸』が衝突するまでの経緯を書いています。

何故、衝突が起こったのか。

防衛省や関係各所の調査資料を元に、読者の皆様に伝えようと思います。

第三幕　漆黒の海で起きた悲劇

訓練査閲後、『あたご』は早急に隊司令から受けた指摘事項の改善を図るため、八月の中間修理終了後、九月に鹿児島における雑音測定及び横須賀における装備機器の作動試験への進出、帰投時の航海の機会を捉えて乗員への教育を実施し、その結果、訓練査閲における隊司令からの指摘事項は改善できたものと考えていた。

なお、同年の一〇月には、アメリカ合衆国の試験評価施設を使用した装備認定試験（ＳＱＴ）に向け舞鶴港を出港するまで、停泊状態でＳＱＴ事前訓練を実施しており、航海を伴う訓練は行っていなかった。

これが、衝突事故に関する調査の過程であげられた事故艦船の就役訓練等の概要の一部である。

続いて事故艦船の行動の概要。

『あたご』は平成十九年一〇月二十五日木曜日に舞鶴港を出港し、同年十一月五日木曜日にハワイ・真珠湾（パールハーバー）に入港、ＳＱＴ実施後、平成二〇年二月六日水曜日午前十時（現地時間）真珠湾を出港、横須賀港に同年二月十九日火曜日午前八時三〇分入港予定で行動していた。

真珠湾を出港し、母国の港に向かい始めた瞬間、運命のカウントダウンが始まった。

それは悲しいだけの、ただの悲劇までの束の間の時間だった。

広い太平洋の海を、イージス艦『あたご』が日本に向けて舵を取っていた。針路を西北西として艦首を向け、高度なコンピュータシステムを満載した最新鋭のイージス艦が翔ける。

その艦上で海風を浴びているのが、あたごだった。短く縛ったポニーテールが可愛らしい彼女は、その整った顔立ちをさらに可愛らしく微笑ませて、鼻歌を歌っていた。

久しぶりに日本に帰れるのだから、嬉しいのは仕方なかった。四ヶ月ぶりの日本であり、この航海が終われば当分の間は休みだろう。

「長い間細かくて長ったらしい試験やらばかりだったから、日本に帰ったら久しぶりにうんと羽を伸ばそうかな。　みょうこう姉さんは今頃どうしているんだろ。　舞鶴にいるのか、それとも別の港にいるのかな」

艦は母港にずっと留まっているわけではない。予定や演習の事情で日本中の港を回ることだってあるし、時には外国に行くこともある。外国に行くケースは特に非常事態が常だが、艦は母港を中心に各港を行き来する。

あたごが向かう先の横須賀港は日本で最も大きな軍港であり、在日米軍の艦魂も含めて仲間もたくさんいる。

そこに姉がいる可能性だって十分ある。日本に帰りたい、姉さんに会いたい、という思いがあたごの中で大きくなっていった。

また姉と会ったら妹分補充とか言われていつもの通りになるだろうが、それでもあたごは姉と会えることは勿論嬉しかった。あたごもやっぱり、みょうこう姉さんが大好きだから。

「えへへ……」

姉と会った時を想像して、あたごは照れ臭く微笑む。

顔を上げた先に見えるものは陸も何もない水平線だが、あの先に行けば姉さんたちがいる日本に帰れる。あたごはそれを思い、胸がわくわくするのを感じた。

ああ、早く帰りたい。

『あたご』はその思いを表すかのように、白波を翔けながら日本への航路に向かうのだった。

艦が航行する上で最も基礎的で、かつ重要なのが、“見張り”と

言っても過言ではない。

そしてその見張りを実行することを一部としたのが、当直である。

この時の『あたご』の当直体制は五直体制だった。

本来の『あたご』の通常航海時は基本的に当直体制を四直体制としていたが、艦長の令により、真珠湾からの帰途については、所要の乗員にSQT実施報告を作成する時間を与えるため、艦内態勢を「通常航海直及び艦内哨戒配備における立直時間について」（あたご艦橋命令（甲）第19－4－05号。19．10．23）により通常航海直五直体制としていた。

二〇〇八（平成二〇）年二月十九日火曜日午前二時五分――――

真珠湾を出港して約二週間が経過したころ、艦は徐々に日本近海に近づいていた。

艦橋には『あたご』の航海長・後潟桂太郎（うしろがたけいたろう）三等海佐が第一直の当直士官に就いていた。

航海長は海図と電子海図による本艦の位置を確認した。

「寒くなってきたな」

「パールハーバーを出てまる二週間ですからね。既に日本近海を北上しているあたりですから、気温も低下しているはずです」

「その通りだな。　ハワイにいて忘れていたが、日本は二月の真冬真っただ中だからな」

航海長は外のウイングにいる見張り員を見た。彼らは厚着の防寒着を着て、真っ暗闇の海に目を見張っているが、風がよく当たるウイングにいては凍えてしまうだろう。

「こんな寒い外にいつまでも置いていては風邪をひくぞ。　中に入れてやれ」

こうして航海長は、日本への北上に従う急激な気温の低下によって見張り当直員が体調を崩すことを危惧し、ウイングにおいて立直していた左右見張り員各一名を艦橋内に配置すること（その再艦橋

の扉は閉）とし、その旨を指示した。
　しかしこの単なる当直員への気遣いが、事故発生の調査によって、事故の原因の一つではないかという意味を少なからず持たせてしまうことになる。

　午前三時四十九分、第二の当直士官である水雷長・長岩友久（ながいわともひさ）三等海佐が艦橋にあがった。そして海図台において船位を確認した後、左右見張り員が艦橋内にいることに気付いて違和感を覚えた。
「（なんで当直の見張りが艦橋内（なか）にいるんだ……？）」
　本当なら雨等が降っている場合を除いて当直見張り員はウイングに出ていなければならない。当直交代後に水雷長は見張り員をウイングに出すよう指示するつもりであったが、その後失念し、第二直においても見張り員は引き続き艦橋内で立直していた。

　一方、ＣＩＣでは、舞鶴出港に先立ち、船務長・安宅辰人（あたかたつと）三等海佐は電測員長に対し、ＳＱＴのための真珠湾往復航行において、ＣＩＣにおける当直体制を艦橋と同様の五直体制とし、電測員を五組に分け、各直七名ずつの直編成とするよう指示した。
　電測員長は、真珠湾出港に先立ち、船務長の許可を得ることなく午前〇時から四時の当直においてはＣＩＣ各当直員先任者の裁量で適宜交代しながら減員して立直して良いとの指示を、第二直を除く各当直員先任者に対し個々に行った。
　その理由は、各直には電測員長レベルの技能を有している者が二名以上おり、当該技能保有者一名を含む三名の当直員を確保すれば運航安全上問題ないと考えたことと、ＳＱＴ期間中電測員が他の配置に比して忙しく訓練その他の業務に従事していたため休ませようと考えたことによる。
　電測員長は当初、陸岸に近づいた場合や目標が多くなってきた場

合は通常の体制に戻すことを考えていたが、その後失念し、日本近海に至ってからも通常の体制に戻す指示を出さなかった。
第二直を除く各当直員先任者は、この指示を受け、午前〇時から四時の当直においては、それぞれ当直員を減員していた。

事故当日の午前二時から四時に立直した第一直については、七名の当直員が前半の一時間を三名、後半の一時間を他の四名に分かれて立直していた。

「右約五〇度の目標、針路二四〇度から二六〇度、距離約七〇〇〇ヤードから約八〇〇〇ヤード、ベロシティーリーダーが長く、CPA一〇〇ヤード以下です」
ベロシティーリーダーとは、レーダー上に捕捉した目標の針路、速力を直線の方向と長さで表し、長いほど速力が速いことを意味するものである。
艦橋前部右側に装備されているレーダー指示機OPA－6Eがそれらの数字を表す。これはCICに装備されているOPA－6Eと連接されており、レーダー情報を共有することが可能となっている。又OPA－6Eは自動衝突予防援助（ARPA）機能を有しており、自動補足機能と警報機能を備えている。
続いて、次々と表示される目標の位置や状況を読み上げる。
右前方の漁船群は停止中で危険性はないと聞いたが、全ての漁船が停止しているわけではない。
ベロシティーリーダーの表示から、右約五〇度の目標及び右約六〇度の目標は、艦首を横切る態勢であったため、本艦に近づく可能性があると判断し、画面上の目標データの方位を確認した後、ジャイロコンパスレピーターで方位を確認するため、第二当直士官が艦橋中央へ移動した。
第二直右見張り員は、午前三時五十八分頃に申し継ぎを終了した後、幾つもの目標を視認、この内新たに視認した右五度水平線の目

標については、午前四時二分頃、見張り通信系により第二直当直士官に報告したが、その他の目標については、動静の変化があれば報告するつもりであったため、この時点では報告しなかった。

その後、事故発生時刻までの間に何度も幾数の目標を捉え、追い、確認したが、中には視認ができても画面上で確認できなかったものもあった。だが視認では確認できたので、特に注目することはなかった。

そして午前四時ごろに『清徳丸』を含めた四隻の漁船を確認。この時はまだ衝突の危険性もないと判断していた。

第二直当直士官は、ジャイロコンパスレピーターで右約五〇度の目標及び右約六〇度の目標の方位が上ることを確認した。又、右約六十五度の目標を含む三隻から四隻の紅灯の真方位は〇三〇度付近であり、いずれも方位が落ちることを認識した。

なお、この際目標を自ら視認し、明確に方位が変化していることを確認していたため、自ら処置できると考え、見張り員、CIC等への測的指示を行っておらず、危険性がないと考えたため艦長への報告を行うことはしなかった。

午前四時三分。

一人の第二当直信号員が紅灯を掲げた四隻の目標のうち、艦首側の一隻の方位が上り始めたことを双眼鏡で確認し、「右の漁船増速、方位上ります」と第二直当直士官に報告した。

黒い絵の具をベタ塗したような真っ黒な闇が支配する海を、危う

く欠伸を出るところを辛うじて飲み込んだあたごが見詰めていた。
その闇だけが支配する海に、ぽつぽつと浮かぶ光の点。微かにポツンと赤く光るのは、漁船の船灯だった。
海の夜というのは、正に闇の世界だ。まったくと言って良いほど何も見えない。だが船乗りは、そんな危険な夜の海を航海する時も、レーダー画面を見るのは勿論、肉眼での見張りも実施しなければならないのだ。
何も見えないが、その中に浮かぶ船灯を視認するのが見張りの役目だ。
もし見張りを怠れば、大惨事を招きかねない。
艦に乗る者は勿論、あたごもそれは十分承知であったし、自分が艦魂としての生を受けた以上、生きる上の常識だった。
あたごはずっと先に見えるぽつぽつと浮かぶ赤い光を見て、微かに微笑みかけた。あの漁船にも自分と同じ船魂がいる。今の時期は漁の最盛期なので、漁船が多く見られるようになる。お疲れ様、とあたごは心の中で優しく語りかけた。
まだ日が昇らない真っ暗闇の寒い海で、一隻の巨大なイージス艦と小さな漁船四隻が出会った。そしてお互いに近づいていくが、危険というものなどお互い微塵も感じてはいなかった。

午前四時四分。

第二直当直士官は、目視で艦橋中央から右の方向を見た時、方位が落ちると認識していた船舶の紅灯のうち二隻から三隻を視認し、目測で『あたご』から最も近い目標を認識していたが、方位が相変わらず落ちていたことから衝突の恐れはないと判断した。
第二直当直士官は、当該目標が右約五〇度及び右約六〇度の目標より近いと思った。

「こっちの方が近いな」
と言いつつ、距離確認のためOPA－６Eの前へ移動し当該目標の捜索をしたが、画面上に該当する映像はなかった。
同じく第二直信号員Aも同時刻に同じ目標を双眼鏡で視認し、最も近い位置にいた目標の方位・距離を右七〇度約一〇〇〇mと認識したが、引き続き方位が落ちていたので、危険を感じることはなかった。以後、第二直信号員Aは、前方を横切る目標を横切り船として注視し、右七〇度方向の目標に関して注意を払わなかった。
この右七〇度方向に確認されていた目標が、『清徳丸』だった。

午前四時五分。

第二直当直士官は、方位が落ちると認識していた目標をジャイロコンパスレピーターで測定。その結果、真方位は〇四二度から〇四三度であったが、OPA－６Eでは引き続き映像を確認できなかった。
当該目標は近接するものの、目視では引き続き方位が落ち、CPAは五〇〇ヤードから一〇〇〇ヤードで艦尾を通過し、衝突の危険はないものと考え、これを確認するためさらにOPA－６Eで目標を捜索した。

午前四時六分。

波の音だけが聞こえる、基本的に静寂な黒い海の上で、あたごは、右七〇度から、右八〇度二〇〇〇mから三〇〇〇mに接近していた『清徳丸』を見つけて、ぎょっとなった。
「え…？」
いつの間にかここまで近づいていた一隻の漁船に、あたごは驚き

を隠せなかった。確かに前から当直員の眼にも確認されていたが、ここまで近づいてくるとは思わなかったのだ。
というよりは、実際にはお互いに近づいていた。
「漁船増速、面舵！」
とっさに第二直信号員Ａが叫ぶように第二直当直士官に報告した。第二直当直士官は、第二直信号員Ａの報告が、先の四時四分頃に右約七〇度に視認し、方位が落ちると認識していた目標ではなく、右艦首を横切る動きをしていた右約五〇度又は右約六〇度の別の目標に関するものと考え、ＯＰＡ－６Ｅ前から艦橋中央に移動し、両目標の方位が上っていることを確認した。
この時点で、信号員の報告を、当直士官は間違った方として認識してしまっていた。
右七〇度で確認された『清徳丸』ではなく、別の目標と考えてしまった。

そして、悲劇は起こる。

午前四時六分。

時計の針が四時六分を少し過ぎた時、第二直信号員Ａの慌てた声が艦橋中に通った。
「近い、近い、近い、近い！」
近い、と連呼しつつ右舷ウイングに移動した信号員を見て、第二直当直士官は、ジャイロコンパスレピーター右側に身を乗り出した。
「ッ！！」
右方向を確認すると、右七〇度一〇〇ヤードという近い位置に漁船の紅灯がはっきりと見えた。
船の単位である一マイルがヤードに直すと一七六〇ヤードである。一マイルはメートルに直すと一八五二メートル。

一〇〇ヤードというのが、どれだけ近いのかがわかる。
第二直当直士官は、その近さに少なからずの驚きをもったが、冷静だった。
紅灯を視認していること及び方位が上ることとから新たな追い越しの漁船であると判断し、距離が近く切迫した危険は感じたものの、針路を変えずに減速すれば相手船が無難に追い越すものと判断し、目標を先に行かせるため「両舷停止、自動操舵やめ」を令した。
『あたご』は衝突回避を促すため、減速を始めた。しかし、相手もまた『あたご』が避けてくれると思っているのか、それとも見えていないのか、わからないが『清徳丸』もまた変化を起こすようなことはしなかった。
二隻は徐々にお互いの距離を縮めていく。

「あ、危ないですね……」
あたごはハラハラと闇の中にぽっと浮かぶ赤い光を見詰めていた。しかも近すぎて変な寒気がした。
このような経験は初めてではない。今までだって真夜中の海を航海する途中で何度も漁船と遭遇したこともある。
そして海の上では、漁船等といった小さな船が大きな船を驚かすことは全然珍しいことではない。
大型船の前を平気で横切る漁船もよくいるし、停泊してる大型船のそばをボートが面白半分に通るという海のマナーの悪さも問題になっている。
特に船舶が渋滞するかのように行き交う浦賀水道付近の漁船は恐ろしい。漁の時期もあって、漁船や小型船の往来が頻繁になっている。だから浦賀水道では大型船はかなり神経を使う。
これもその一種であるとあたごは思った。だが、その考えがいけなかった。
またいつものように「危なかった」というだけで終わってくれる、そんな甘い考えは厳しい海の世界では通用するわけがなく、むしろ

制裁を与えるのに十分な材料となった。
その時、闇の世界に一筋の光が射した。
いや、一筋というほどではない。ただ、ぼうっと光が灯した気がした。
それは月明かりだった。
闇に船体を溶け込ませ、紅灯しか見えなかった漁船の姿が、月明かりによって初めて視認された。
この直後、『あたご』は月明かりによって目標が漁船であることを確認したと同時に、漁船の針路が『あたご』の艦首を向いていたことを悟った。

「！！！」
それを知った者が全員、息を呑んだ瞬間だった。
『あたご』は減速し、向こうが避けてくれるものばかりと考えていた。だが、漁船の針路はまっすぐに『あたご』の艦首を向いていて、その針路は変わることがない。
「汽笛、鳴らせッ！」
ボォッ、ボォッ、ボォッ、ボォッ、ボォッ、ボォッ！！
衝突の危険を察知した船舶は汽笛を短音五回以上を鳴らすことが法律で決まっている。『あたご』はそれに従い、汽笛短音六回を吹鳴した。一回目の吹鳴中に「後進一杯！」の令が下った。
「だ、駄目ッ！　来ては駄目ッ！！」
あたごは近づいてくる漁船に向かって、思いのたけを叫んだ。相手は自分の声が届いていないのか、針路も速度も変わることはない。
第二直信号員Aは、ウィングに出た後、信号探照灯で接近する漁船に向けて照射を行った。この際、照射開始直前に短音の汽笛が連続して吹鳴したことを信号員は聴いていた。
第二直右見張り員は、第二直信号員Aの連呼及びウィングに出た

行動から右を見たところ、右七〇度から右八〇度付近、距離約七〇mから約一〇〇mに漁船『清徳丸』を視認した。漁船に人は見えず、白灯と紅灯を点灯しており、『あたご』より高速で、変針することなく艦首に潜り込むのを見た。

第二信号当直員B（第二直信号員B）も右舷側に駆けていく第二直信号員Aに続いて、ウイングに出て接近する『清徳丸』を視認していた。やはり人影は確認できず、『清徳丸』が若干増速し、若干面舵を取っている所を見た。

又、第二直副直士官は、『清徳丸』が五インチ砲右舷側の死角に入る直前にわずかに増速、面舵を取ったように見えた。

午前四時七分。

四時七分少し前、第二直信号員Aは、『清徳丸』が変針することなく概略針路二五〇度で、漁船の船尾端一mぐらいが見えていると きにドス、という音を聞き、漁船の船体が揺れたのを確認して「漁船と衝突ッ！」と艦橋に向かって叫んだ。

ちなみに海難審判の過程で明らかになった衝突角度については、『あたご』の艦首が『清徳丸』の左舷ほぼ中央部に後方から衝突し、その角度は四十七度であった。

「きゃあッ！」

あたごは思わず首筋に走った痛みに驚き、膝を折った。と、同時に艦自体にドンという音が聞こえた。あたごは微かに呻きながら、思わず首に触れた手をそっと離して目を通してみると、その手のひらは赤い血でべっとりと濡れていた。

あたごは初めて見る自分の血に目を丸くして「ヒッ」と声を漏らしかけたが、それよりさっきまで見えていた漁船が気がかりで、慌てて立ち上がった。血が流れる首筋がズキズキと痛んだが、どうでもよかった。

しかしあたごが辺りを見渡した時には、さっきまで見えていた漁船の姿はどこにもなく、あるのは真っ黒な海と静寂、そして近くにいる三隻の漁船の微かに浮かぶ紅灯だけだった。

「右艦首、漁船と衝突！」

そんな衝撃に値する報告が艦内に伝達された。

四時八分頃、第二直当直士官の指示で「右艦首に漁船衝突、海難対処用意、救助艇用意」を艦内に令した。

――二〇〇八（平成二〇）年二月十九日火曜日午前四時七分。

千葉県野島埼南方海域、野島埼灯台の南約四十二ｋｍにおいて海上自衛隊所属の護衛艦『あたご』と漁船『清徳丸』が衝突するという海難事故が発生した。

第三幕　漆黒の海で起きた悲劇（後書き）

私も練習船で航海当直のために船橋にあがったことがありますが……私の時は16~20（ヨンパーという）の当直に入っていたのですが。当直に入った午後四時はまだ明るいから良いのですが、午後五時半ごろには次第に暗くなり、当直が後半に入った頃には真っ暗で、船橋の中もレーダー機器の画面が灯るのみで、まったくと言って良いほど視界が遮られております。

あの状態で外を見張るというのは本当に大変です。あんな真っ暗な船橋で見張りをするというのは、とても神経を使います。

暗い中でいきなり明るい光を照らしては目に悪いので、極力光は灯さないようにしているのでますます暗闇の中に身を置くような状態になります。

海図台も、最低限の光を灯すのみです。なので、夜の当直時は懐中電灯（トーチ）は欠かせません。

これはあくまで個人の経験ですが、おそらく自衛艦のみならずほとんどの船舶が共通している事だと思います。

夜の航海って、本当に大変なんですよ。何度も言いますが、本当に何も見えませんから。

もう一つ、作中でも記しましたが、漁船等といった小型船が大型船をビビらせる事や海のマナーの悪さは、実際にある話です。

浦賀水道やその付近は本当に多くの船舶の交通が激しいです。そして漁船等といった小型船の往来も頻繁で、大型船はかなり神経を使います。

漁船は大型船から見れば、本当に豆のように小さくて、しかもチョロチョロと走るような船ですから、周りに漁船がいたら通りにくいのが本音です。

私が乗る練習船が護衛艦『くらま』と韓国船が衝突した関門海峡を通った時の話ですが……
突然本船の前に現れて、平気で横切る漁船は、実際にこの目で見たことがあります。
あの時は「危な…ッ」と思うほどで驚きました。汽笛も鳴らすほどでしたからね。
勿論、言っておきますが、“中にはそういう船もいる”ってだけで、必ずしも全ての漁船がそうであるということを申しているわけではありませんのでご注意ください。これはあくまで私の経験上の話ですから。
あと停泊している大型船のすぐそばを面白半分に通るボートや小型船、観光船がいるというのも本当です。そしてこれも個人的に経験しています。
錨を下ろしている状態の時に、五人ぐらい乗ったボートが船体のすぐそばをぐるりと回っていて、ちょっと迷惑というか、危ないなぁ…と思う経験もありました。

海の上は、危険がいっぱいで、ちゃんとそういう危険を防ぐために法律があるのです。そして法律の前に、常識やマナーといったのもあり、それが問題となっていることも現実です。

そして海の事故も少なくありません。これまでにも世界中の海で幾つもの事故が起こりました。そしてこれからもいつどの船が、どこの海で事故が発生するのか。
この“護衛艦あたご漁船清徳丸衝突事件”も、その一例であるのです。
起こってはいけなかった悲しい海難事故として、ちゃんとした中身を知ってもらって、人々の記憶に刻まれることを祈る思いで執筆に励んでいきたいと思います。

第四幕　衝突海難事故発生（前書き）

イージス艦『あたご』と漁船『清徳丸』の衝突事故が発生。
『あたご』、そして報告を受けて駈けつけた海上自衛隊は懸命なる捜索を開始しますが……

第四幕　衝突海難事故発生

二〇〇八（平成二〇）年二月十九日火曜日午前四時七分、千葉県野島埼南方海域において護衛艦『あたご』と漁船『清徳丸（せいとくまる）』が衝突するという海難事故が発生した。

北緯３４度３１．５分、東経１３９度４８．６分（野島埼灯台の南約４２ｋｍ）の海域。天候は晴れ、風は北東５ノット（約２．５ｍ／秒）、気温８度、視程１８ｋｍ、海上模様は平穏だった。

護衛艦『あたご』は真珠湾から横須賀港に向かって航行中だった。一方の漁船『清徳丸』はマグロのはえなわ漁目的で川津漁港（千葉県勝浦市）を出港し、三宅島北方へ向けて航行中だった。

艦首に漁船衝突を察知した『あたご』は直ちに両舷停止の令が第二当直士官から下された。

そして第二当直士官の指示により、『あたご』の隔壁灯を点灯した。

右ウイングからは信号員が投げた救命浮環が一個、真っ黒な海に着水した。だが、その浮環を掴む者は誰一人いなかった。

さらに『あたご』は信号探照灯を用いた捜索を開始した。そして四時九分、衝突して二分後に艦橋右ウィングに移動した艦長は、艦に後進の行き脚（艦が動いている状態）を認めた。

「行き脚止めッ」

艦長はすぐに艦の行き脚を止めることを決め、第二直当直士官に指示して、行き脚を止めさせた。

その後、第二直当直士官は、右ウィングにて艦首方向一五〇〇ヤードから二〇〇〇ヤードを左に進む漁船一隻を視認した。

漁船は紅灯を灯しながら、左に横切るように進んでいた。衝突した漁船の仲間だろうと見た者ならわかるだろう。

艦長は、行き脚が止まった後、第一直当直士官が艦橋にいるのを

認めたため、第二直当直士官に第一直当直士官と当直士官を交代するように命じた。
「当直士官、交代します」
「当直士官、交代しました」
二人は当直交代の定められた報告を述べるが、その声と表情には緊張の色が伺えた。
それも当然だ、と艦長は思った。実際、自分にも焦りがあると自覚していた。
漁船と衝突。これは由々しき事態であり、とんでもない出来事だった。
第二直当直士官は、艦橋内で当直士官を交代した後に『あたご』の右舷側を漁船二隻が緑灯を点け艦尾方向に進むのを視認し、捜索活動に影響がないことを確認した。
「第三班、第六班も総員よろしッ！」
『あたご』の上甲板前後部両方の艦上には乗員が整列していた。海難対処部署の発動により、救助用具の準備を行うと共に、乗員たちは目視による海面の捜索を開始した。
だが、灯りを灯しても視認できる範囲は限られている。そもそも真っ暗な海を肉眼で捜すなど、不可能に等しい事なのだ。
たとえ昼間だとしても、艦の上から海に向かって何かを捜索するなど限りなく難しい事だ。海の上に何かが浮かんでいても、艦の上から広すぎる海を見て捜そうとしても、豆粒を捜すようなものだ。
それも視界が限りなく狭い真っ暗な海なら、海の上から何かを捜しあてるなど、一〇〇パーセント不可能である。
だが、やらなければならない。理屈も何も関係ない。人の命が懸っているのだから、なんとしてでもやらなければいけないのだ。
乗員たちが艦上から懸命な捜索をしている一方、彼女は現実に衝撃を打たれ、震えていた。
「……あ、ああ……わ、私……」
ガクガクと震える両足は立っているのが不思議なくらいだった。

顔は蒼白になり、目は目一杯開かれ、手が触れた口元はわなわなと震え、歯がガチガチと鳴る。
頭の血がサーッと下がり、どうして良いか全然わからなかった。
「私……なんて、ことを……」
合わせ、ぎゅっと握り締める両手も震える。目を瞑り、震えるあたごは、見るに耐えない姿となっていた。
「お願い……見つけて……お願いだから、見つけて…ッ！」
本格的に捜索を開始する乗員たちに向けて、あたごは涙ながら必死に願いを込めるのだった。

四時十八分、『あたご』から第一救助艇が発進し、四時二十一分に『清徳丸』の二つに分断された船体の船尾部付近に到着、漁船乗員の捜索を開始した。
だが船尾部付近に乗員が見つからなかったため、第一救助艇は漁船の船首部分付近に移動し捜索に従事した。

「…………ッ」
艦長は真っ二つになって浮かぶ漁船の荒れ果てた姿を見て、呻いた。二つに分断されて浮かぶ船首付近を捜索する救助艇を見詰めていると、本艦内に浸水などの異常がないことが報告された。
「艦の運動に関わる者を除いて、すべての乗員は上甲板に移動し、捜索に全力を注げ」
四時二十一分、艦長は、艦内に浸水などの異状がないことを確認した後、艦の運動に必要な人員を除いた全員を上甲板に上げ、艦上からの目視による捜索を強化した。

四時二十六分。
第一救助艇は、船体に書かれていた船名を確認。漁船を『清徳丸』であることを確認した。

「第一救助艇から報告。　本艦と衝突した漁船の船名を『清徳丸』と、確認しました」

「……そうか」

艦橋内はまるで鬱が降りたかのような雰囲気だった。艦橋にいる者全てが、重い空気を背負っていた。

「第二救助艇発進。　引き続き、漁船乗員の捜索を行うように」

四時二十八分、第二救助艇が発進、『清徳丸』乗員の捜索を開始した。以後、第二救助艇は『清徳丸』の船尾部分を中心に捜索した後、潮流方向の海面捜索を実施した。

ちなみに、既に四時二十三分に『あたご』は事故発生の事を海上保安庁第三管区海上保安本部に通報していた。

四時二十九分、『あたご』に装備されているＧＣＳ（射撃指揮システム）の光学照準装置及びＣＩＷＳ（近距離防空システム）の赤外線照準装置による捜索を開始した。

まさか自艦と衝突し、遭難した民間人の捜索に使うことになるとは思いもしなかっただろう。日本の五番目のイージス艦として、最新鋭の防空システムを備えた『あたご』は、その装備システムを駆使して、漁船乗員の捜索を懸命に行った。

だがそれでも、漁船乗員を発見することはできなかった――――

漁船との衝突を受け、『あたご』は四時半ごろに護衛艦隊司令部に報告しており、今頃は自衛艦隊司令部、そして政府に情報が回っている頃だろう。その時、報告を受けた護衛艦『しらゆき』が、続いて『くりはま』が現場海域に到着した。

栗のような茶髪の短髪に、くりっとした丸い目が愛らしい少女、艦魂のくりはまが『あたご』艦上に降り立った。

後から到着した艦魂のくりはまが急いでやってきた頃には、しらゆきがあたごを慰めている所だった。

くりはまはあたごの様子を見て、絶句した。

初めて顔を見たが、あたごの整った顔立ちが蒼白になって涙と鼻

水でぐしゃぐしゃになって酷い有様になっていた。ぺたんと冷たい甲板に座り、震えながら両手で頭を抱えている姿は、痛々しかった。そんなあたごを、そっと抱き締めている雪のように白い、眼鏡の少女が、艦魂のしらゆきだった。
しらゆきは姉のように、震えるあたごを優しく包み込んでいた。
くりはまはしらゆきに視線を送るが、至って冷静なしらゆきは、首を横に振った。
「……あたごちゃん」
「ごめんなさい、ごめんなさい……」
涙ながらに震えながら発した言葉は、謝罪だった。
彼女はそれ以来謝罪の言葉を繰り返しながら、震え、身を小さくした。
「…ッ。　――しらゆきさん、状況は……」
「…………」
しらゆきは首を横に振る。
「―――ッ」
行方不明になった漁船乗員は、まだ見つかっていない。
くりはまは悟り、苦虫を噛み潰したような表情になった。
「――私の、せいです……」
「！！」
くりはまとしらゆきは、一斉にあたごの方に視線を向けた。
「私が……ちゃんとしていれば……気を付けていれば……早く、避けていれば……こんなことには……」
しらゆきの腕の中で震え、泣きながら言葉を紡ぐあたごは見るに耐えない姿だった。
「あたごちゃん、しっかりして。　今は自分を責める時じゃないよ……。　きっと、漁船の人たちも……」
くりはまは口を噤んだ。軽く、助かるよなんて言えなかった。何故なら、より重く、深く状況を察していたから、逆に最後まで言えなかった。こんな真っ暗な海に投げ出された人間を捜すなんて、不

可能に等しい。
「私……必死に捜したけど……クルーの人たちも…一生懸命捜してくれてるけど……見つからない、見つからないんです…ッ！　色んなシステムを使っても、全然見つからない…ッ！！」
「あ、あたごちゃ……」
半狂乱になって、泣きながら言葉を紡ぐあたごに、くりはまは動揺した。
「漁船の船魂も……私が……」
「——ッ！」
その先は言わせてはいけないと、くりはまは思った。真っ二つになり、“魂”が抜けた無残な姿で浮かぶ漁船を思い出して、くりはまは叫んだ。
「私たちも、捜す…ッ！　———しらゆきさんッ！」
くりはまの大声に、特に驚く様子もなく、しらゆきが顔を上げる。
「今より、漁船乗員の捜索を行いますッ！」
「……了解」
しらゆきがあたごを腕の中に抱きながら、コクリと頷いた。

先に現場海域に到着した『しらゆき』は午前五時十五分以降、内火艇二隻により『あたご』の北東側を、『くりはま』は五時二十三分以降、作業艇一隻により『あたご』の北西側海域の捜索に従事した。

四時五十九分、『あたご』から複合型作業艇が降下し、周辺海面の浮遊物を揚収しつつ『清徳丸』乗員の捜索を実施した。
五時四十六分、第一救助艇及び複合型作業艇の乗員が船首部分、船尾部分それぞれの船体を叩くことによって、船体内の生存者の有無を確認した。同時刻、『しらゆき』は捜索海域を衝突地点付近に変更した。
五時四十八分、複合型作業艇が揚収した漁網標識に船名の『清徳

丸』、漁港名の『川津』の文字を確認した。
　朝日が昇り、視界も大分良くなったが、海上自衛隊所属の護衛艦の懸命な捜索にも関わらず、『清徳丸』の乗員が発見されることはなかった。朝、人々が目覚めた頃、一番にテレビを付けて目にしたものは、イージス艦と漁船が衝突したという大事件のニュースだった。
　浮かぶのは、真っ二つになった、漁船船首と船尾部分。その周囲を海自が捜索するが、成果は未だに得られなかった。
　その上空には第二十一航空群所属のヘリコプターが飛びまわり、空からの捜索に従事していた。
　午前七時台には、横須賀港から出港した護衛艦『いかづち』と『はるさめ』が現場海域に到着した。護衛艦『いかづち』には第一護衛隊群司令が乗艦しており、現場における指揮を執った。
　護衛艦『いかづち』の艦内、会議室には、現場海域に集結したあたごとしらゆきを除いた艦魂たちがいた。と言っても、あたごとしらゆきがいないので、この場にいるのはいかづちを含め、三人だけだった。
「それでは今回の状況を整理します」
　一人、指揮を執るのは、第一護衛隊群司令が乗艦したむらさめ型護衛艦七番艦『いかづち』の艦魂、いかづちだった。
　成熟した女性の優美さと美貌を同時に、童女のような可憐さがその姿に漂っている少女、いかづちの表情は普段の彼女には考えられない冷静さと、真剣さがあった。
「平成二〇年二月十九日火曜日・午前四時七分ごろ、ここ、千葉県野島埼南方海域において我が海上自衛隊所属の護衛艦『あたご』と漁船『清徳丸』の衝突海難事故が発生。　私たちは司令部の報告と命令を受け、現場海域に集結、これより捜索の予定」

いかづちは今回の状況を読み上げ、二人の顔を見渡した。一人は緊張を垣間見る真剣な表情で、一人は無粋な表情であった。
「現在、漁船側乗員の行方不明者を捜索する任が全員に与えられている。行方不明者の数は不明ですが、全力を以て捜索にあたるように。以上。なにか質問は？」
いかづちは再び二人の顔をゆっくりと見渡すが、反応がないことを確認すると、静かに頷いた。
「では、各自自艦に――」
「――あ、あの…ッ！」
声をあげ、いかづちが視線を向けた先にいたのは、心配そうな瞳を持ったくりはまだった。
「その…ッ」
声をあげたのは良いが、何かを言おうと戸惑っているかのようだった。だが、振り絞るように声をあげる。
「あ、あたごちゃんは……」
いかづちは、唇を噛み、きゅっと胸の前で手を握り締めている、不安に満ちた瞳を向けた一人の少女を見詰め、優しく微笑みかけた。
「今はしらゆきが付いているから、大丈夫ですよ。私たちは、捜索に従事しましょう」
「……は、はい」
「あたごが心配なのはわかりますが、今、私たちがするべきことは漁船の方々の捜索です。今は、あたごの事はしらゆきに任せましょう」
「…………」
くりはまは心配そうに歪めた表情を変えなかったが、一応納得したのか、黙ってその場をあとにした。
「……本当に、大丈夫なのか？」
「え…？」
寂しげな瞳で、去りゆくくりはまを見送ったいかづちは、低く通った声の持ち主に振り返った。

そこには、腕を組み、椅子に腰かけた長髪のクールな少女、いかづちの姉にあたるむらさめ型護衛艦二番艦『はるさめ』の艦魂、はるさめがいた。

「…はい。　あたごには、しらゆきが付いていますから……きっと、あの娘がそばにいれば…」

「違う」

「えっ？」

ピシャリと冷たく遮られたはるさめを、いかづちは目を丸くして見詰める。

「捜索中の漁船側乗員の事だ。　衝突事故発生は……午前四時過ぎだったな？」

「……はい、報告では」

「二月の冷たい海、それも真っ暗な海で、救命具もなしにそんな海に投げ出されては、未だに見つからないのであれば、生存の可能性は限りなく低いな」

容赦なく、はっきりと断言するはるさめに、いかづちは複雑な表情になった。

確かにはるさめの言うことは最もだった。真冬の暗い海に投げ出され、未だに発見されなければ、生きている可能性は極めて低いだろう。真っ二つになった船体を見れば、絶望する材料には十分だった。

「……これからが正念場だな、彼女にとっては」

「…………」

海上自衛隊のイージス艦が、民間の漁船と衝突。これはマスコミの格好の餌食となり、世間の目に触れて、批判の対象として浴びせられるだろう。

最近まで自衛隊の不祥事が相次ぎ、しかもこれはなだしお事件（海自潜水艦が遊漁船と衝突した事故）から二〇年経って以来の衝突事故である。

就役して一年という最新鋭のイージス艦という点についても、注

目され、彼女は罪と世間に苦しめられることになる。
「彼女には、海保と海難審判所の捜査の手がこの先ずっと続くことになるだろう」
「……そうですね。――気の毒です」
「気の毒なのは、漁船側も同じだがな。軍艦であるイージス艦に衝突されては、脆い小さな船体じゃ敵わんからな」
はるさめの不適切というか、容赦のない言動に、いかづちはますます表情を難しくさせた。普段から姉の一人であるはるさめは姉妹の中でも容赦がない人なので、いかづちは姉の性格を普段から理解していても、完全にはその言動には理解できなかった。
「どっちに、非があると思う？」
「……はるさめ姉さん、今はそんな時じゃありません。それより、行方不明者の捜索を……」
「――ッ」
「そう。まだ捜査も何も始まっていない。だが、既にある所では、我々自衛隊側に非難の目が向けられているらしいぞ」
「確かにさっきも言ったように、彼女には徹底的な捜査が行きわたるだろう。――だが、私が言っているのは、世間の目だ。捜査や罪深さより、世間の目や声が、彼女をより一層苦しめることになるだろう」
「…………」
「たかだか生まれて二、三年。就役して一年の小娘に、その重圧が耐えられるのか、な」
「……姉さんッ」
「……私なら、どうなのかな」
「え…？」
「もし私が彼女の立場なら、私はその重圧に耐えられるのか、ふと疑問が浮かんでな……いかづち、お前はどうだ？」
「…………」
いかづちは考えた。護る対象のはずである国民を殺し、自分を蔑

み、罪を指摘する世間に、その重圧に自分は耐えられるのだろうか、と。

考えてみると、ぞっとする話だった。だが、それが現実に起こり、しかも自分よりずっと若い女の子が、その重圧を受けているのだ。

「…………」

いかづちは黙り込んでしまった。黙り込むしか、なかった。

はるさめもそれ以上口を開くこともなく、二人の姉妹はその場に沈黙してじっとするという、奇妙な時間が続いた。

すでにこの事件は朝のニュースとして日本中に報道され、昼ごろには真っ二つになって浮かぶ漁船の船首・船尾部分や、艦首をへこませて海に漂うイージス艦の姿が、全国中継されていた。

午後十三時十一分、『あたご』は海上保安庁の捜査を受けるため現場海域を離れ、十七時六分、横須賀港に入港した。

そして捜査を受けるために横須賀港に留まる、艦首に傷跡を残した『あたご』の姿が、いつまでも全国中継され、世間の目に触れることとなった。

第四幕　衝突海難事故発生（後書き）

この事件は発生後、様々な論説や調査で判明された事実を巡って、世間を騒がせることになります。

当時の石破防衛相をはじめとした政府責任者や自衛隊最高責任者による、自衛隊の情報公開の姿勢（〝清徳丸を視認したのは『二分前』と長く公言し続けてきたが、調査の結果実は『十二分前』だった〟等）や自衛隊員への教育等の指摘。

そして捜査も進んでいないうちに感情論で一方的に叩かれる自衛隊側。

捜査が進んでも、事故当時の状態を縮図された物しか公開されず、詳細な情報を国民が知ることができなかった状況。

作中であたごは今後、罪深さと世間の目に苦しまれることになりますが……

実際に、事件後に上陸が一ヶ月間禁止された『あたご』艦内で事故当時当直にあたっていた海士長の方が自殺未遂するという事件も起こりました（これを受け、その翌日から乗員の上陸が許可された）

行方不明になった漁船側の乗員も、後にジャンパー等の遺品が発見されただけで、遺体は見つからず、死亡認定され、双方悲しいだけの出来事でした。

次回から、罪に苛まれ、世間に蔑まれるあたごの苦悩の日々を書いていきたいと思います。

が……

残念ながら明日、再乗船のために神戸に発つので…

続きはまた下船してから執筆しようと思います。

ちなみに下船は三月上旬になると思うのでそれ以降になると思います。

何卒ご了承ください。
それではまた次回……と言っても、一カ月ちょい後ですが（苦笑

第五幕　変貌した彼女、堕落―――（前書き）

練習船から無事に帰って参りました。どうもお久しぶりです。

ということで、活動再開として遂に本編を投稿することができました。

もうここからはシリアスしかない感じです。今回もなんだか重い感じです。

第五幕　変貌した彼女、堕落――

　護衛艦『あたご』と漁船『清徳丸』の衝突事故から数日、艦首の一部を損傷した『あたご』は横須賀港の岸壁に停泊していた。事件捜査のために、乗員は一切上陸が禁止され艦内に缶詰状態だった。

　その間に海上保安庁の捜査が『あたご』に入り、艦長や航海長等、『あたご』乗員への事情聴取が開始された。二月二十三日には海洋研究開発機構所属の海洋調査船『かいよう』による現場海域での調査も始まった。

　海保による捜査がある程度進むと、今度は海上幕僚監部の艦船事故調査委員会（以下海幕事故調）が捜査にようやく踏み入れた。海保の捜査を優先していたため、海幕事故調の捜査は遅れて三月四日から行われることになっていた。

　しかし海幕事故調とは別に防衛省・海自内では事故当日の二月十九日午前一〇時から、防衛省に呼んだ『あたご』航海長から衝突時の状況を聴いていたことが判明し、海保側や冬柴国土交通相が不快感を示していた。

　捜査が進むにつれ、事故当時の状況が次々と判明されていくが、途中で防衛省に明かされた既述と海保で聴取された内容が一致しない等と、捜査する側への批判等も起こったが、特に大きな障害はなく捜査は順調に進んだ。

　だが、世間の目は冷たい。自衛隊や海保側の捜査が進んでも、報道はそれを大っぴらに語ることはなかった。縮図された内容しか国民は知ることができず、一部では一方的に『あたご』側に非難の目が向けられていた。

　そして、罪に苛まれた者の末路がここにあった。

　横須賀港に停泊する『あたご』の艦内は重苦しい空気で充満していた。事故以来、事情聴取のために乗員全員は艦内に閉じ込められ、心休まる時がなかった。乗員たちのストレスや疲労は日に日に蓄積

され、『あたご』のへこんだ艦首も痛々しいままだった。
首に包帯を巻いた一人の少女が暗い陰の端で膝を抱えて佇んでいた。陰湿な空気の中、彼女は顔を上げることは一切なかった。
彼女は一人、ずっとそこにいた。瞳は生気を失ったかのように真っ暗で、唇はからからに乾いている。自分の罪深さに散々泣いた涙は枯れて、もう出ない。
膝を抱えて長い間佇む彼女の姿は、まるで死人のようだった。
すべての始まりは、あの真っ暗な闇が支配する、寒い海で起きた悲劇。最新鋭のイージス艦である『あたご』はハワイから日本への帰路の途中で漁船と衝突、漁船は見るも無残な姿になってしまい、漁船側乗員二名が行方不明になった。
必死の捜索に関わらず、乗員は見つからず、漁船の船体も真っ二つに折れて浮いているだけだった。あの光景を、あたごは忘れはしなかった。
「…………」
ぎゅっと膝を抱え、顔を埋める。彼女は息を殺して、小さく震えた。
罪と、自分に辛く当たる冷ややかな目と声。
それは自分の罪を考えれば当然であると、あたごは思った。
世間は予想通り、彼女を罪人として辛く当たった。一方的に辛く当たる世間に、あたごは頭を垂れ、謝罪の言葉を繰り返すことしかできなかった。
あたごの心中は、溢れんばかりに謝罪の言葉でいっぱいだった。
「……ごめんなさい、ごめんなさい……」
ブツブツと、謝罪の言葉を繰り返す。心から漏れる、震える謝罪の言葉を。
「あたごさん……」
事故発生当時指揮艦として捜索を仕切った護衛艦『いかづち』の艦魂、いかづちが謝罪を繰り返し、陰に佇むあたごの姿を見て、細

めた瞳を悲しげに揺らした。
　事故発生以来、ずっとあたごはこんな感じだった。そんなあたごを必死に支えようとしているのが、同じ海自の艦魂であるいかづちたちだった。
　今日もまた、いかづちは彼女たちのお姉さんとして、一人であたごの下にやってきていた。
「…………」
　だが、声をかけ難い。実を言うと、あたごの下にやってくる艦魂は、いかづちぐらいしかいない。
　最初は他の艦魂たちも彼女の下へ訪れ、慰めようとしたが、はるさめの「一人にしてやった方が一番良い」という言葉を発端として、彼女の下から徐々に訪問者が減っていった。
　はるさめの言葉は間違いではない。更にはるさめが「我々が何を言っても、彼女には慰めにもならないし、彼女が背負う罪を軽くすることもできない」とも言ったように。
　だが、それでもいかづちはあたごを放っておくことはできなかった。彼女は本当に苦しんでいる。せめて自分がそばにいてあげなければならない。でないと、彼女は本当に壊れてしまう。支えるものがないと、駄目なのだ。
「あたごさん、おはようございます」
「…………」
「隣、良いですか？」
「…………」
　いかづちは努めて微笑みながら、優しい口調であたごに声をかける。あたごはいつものように反応しないが、いかづちは隣にぺたんと丸いお尻をひんやりとした床に付けた。季節は春を前にした冬、最後の冷え込み。そんな冷えた床にぷるっと来たが、いかづちはあたごの方を振り向いた。
　普段のポニーテールは最近しておらず、さげた長髪が長い間手入れしていない事を物語るようにボサボサだ。いかづちはそっとあた

この頭に触れるが、あたごはやはり反応しなかった。
「髪、ぼさぼさですね。　私が手入れしましょうか」
「…………」
やがて、いかづちはあたごの髪の手入れを始めた。ぼさぼさになった黒髪をブラシで解き、優しく滑らせる。
「駄目ですよ、髪は女の命なんですから。　折角あたごさんは髪が綺麗でポニテが似合うのに、勿体ないです」
「…………」
されるがままに、あたごは無言でいかづちに頭を手入れをされる。
「……あたごさん、気を強く持ってください。　私は、私たちは……あなたの味方ですから」
「…………」
ふと、あたごの髪をブラシで撫でながら、いかづちはそんなことを呟いていた。いかづちがハッと気付いた時には、あたごが久方ぶりの反応を示していた。
「……私」
「え…？」
「私、人殺し……ですよ…」
掻き消えそうな小さな声が紡がれる。
「！！」
いかづちの撫でるブラシが、止まった。
髪を今まで撫でられていたあたごが、ゆっくりとその悲愴な表情をいかづちに振り向かせた。
「人殺しに、味方はいりません……こんな私は、悪い娘なんですから…」
「あたご、さん……」
以前とは別人のように変わってしまった彼女。その悲愴の表情からは、以前の明るい彼女の面影はどこにもなかった。
「私は……他人を死なせてしまったんです……」
後頭部を向けたあたごが、ぼそぼそと呟く。

首に巻いた包帯を、爪で掻きながら。
「私は……生きてはいけない……」
「あ、あたごさん…！　なにを言って…ッ」
「私は――――」

「生まれちゃ、いけなかったんだ――――？」

それを言ったあたごの表情は、虚空だった。瞳はなにを見ているかわからないもので、その口は淡々と言葉を紡いでいた。
そのすぐ後ろで、いかづちは絶句した。いかづちの手から落ちたブラシが寂しい音をたてた。
それ以上、二人とも言葉を発することはなかった。

その夜、いかづちは姉の一人であるはるさめと共にお酒を嗜んでいた。しかし、いかづちの口にお酒が注ぎこまれることはあまりなかった。
「どうした、いかづち。神妙な顔をして」
「はるさめ姉さん……」
誰もいない食堂の長机を挟んで、酒を飲んでいたはるさめがいかづちに問いを投げた。はるさめは酒を飲んでいても、表情も変わらず、酔った様子は微塵も感じられなかった。
「そんな顔をしていては、酒が不味くなる」
「す、すみません……ちょっと、考えごとを……」
「あたごの事か」
即言いあてられてしまったが、いかづちは「うん…」と頷くしかなかった。
「ふん…」
小さく鼻を鳴らすと、はるさめは酒をぐいっと飲み干した。いか

づちは、普段通り酒が飲める姉が理解できないのが心の片隅にあった。
「他人にそこまで気を遣うお前は、相変わらずお人よしだな」
「な…ッ、ね、姉さん……ッ！」
「まだ、彼女のもとに訪れているようだな？」
「…………」
はるさめの言葉に、いかづちは口を噤んだ。
「前にも言ったが、お前が何を発言したり行動しても、どれに対しても彼女の慰めにはならん。むしろ陥れている。やめろ」
「な、何を言ってるんですか…ッ！　あんな……あんなに苦しんでいる彼女を、放っておけるわけな……」
「何をしても無駄だと言うことがわからんのか」
「ッ！」
はっきりとした、突き刺すようなはるさめの言葉。はるさめの圧迫するような威圧感と鋭い視線に、いかづちは耐えるしかなかった。
「罪に苛まれ、一人苦痛を帯びる者に、他者の気易い介入はするべからずだ。二十年前のなだしお事件の時もそうだった」
「――――！！」
なだしお事件。二十年ほど前、横須賀で潜水艦『なだしお』と遊漁船が衝突し、遊漁船側が沈没した事故。あたご事件と同様、自衛隊艦船が民間船と衝突した事件である。
「先輩方から聞いた話だがな。だが、当時の事故当事者であったなだしお殿も、随分と罪に苛まれ苦しまれたそうだ」
「…………」
はるさめは平成生まれなので、当時はまだ生まれていない。だが、はるさめは当時の事故を年輩である艦魂たちからよく聞かされた記憶があるのだ。
「ただでさえ自衛隊（われわれ）は国民に忌み嫌われる存在だ。なだしお殿は罪に苦しんだとしたが、言ってしまえば、罪は両者にあった。なだしお殿にも、沈んだ遊漁船側にも。船である我々が知ってい

るはずである”両方とも悪い”決まりだ。　だが、人間は一方的に自衛隊を批難した。　まるで悪いのはなだしお殿だけ、という風にな。　実際に両者ともその罪を法律で裁かれた。　なだしお殿は最後まで罪を、十字架を背負って生きることになり、他の艦魂も彼女を慰めることなどできるはずがなかった」

海の上の法律では、二隻の船舶間で衝突事故を発生させた際は、二隻とも罪に問われる。

例えば、海の上で錨泊している船舶がいて、停止しているその船舶に別の航行している船舶が衝突してきたとしても、罪は両方に裁かれる。

だが、自衛隊は色々な意味で国民にとっては特殊な存在だった。本来国民を護るはずの組織であるが故も一つの理由かもしれないが、法律とは関係なく感情論で一方的にされることも多かった。

今回の事件も、勿論『あたご』側にも、『清徳丸』側にも罪はある。法律に基づいて、厳正な裁決の下で両者は裁かれることだろう。捜査の結果としても、『あたご』側の方が非が大きいとなるのは確かだが。

「彼女の事は、彼女自身が解決せねばならない。　十字架を背負って生きるという決意を、彼女自身がしなければな」

そして、黙りこんだいかづちを置いて、はるさめは酒が入った瓶を持って食堂の出口へと向かった。背を向けたはるさめが去る際に、「もしくは壊れてそれまでになるか、だ」と言い残した言葉を、いかづちは聞き漏らすことはなかった。そしてその言葉の意味、この先に起こることを、いかづちは知る由もなかった。

いかづちは、『あたご』にいた。はるさめに言われたことで、迷ってしまったいかづちだったが、やはり彼女を放っておくことなどできるはずがなかった。

せめて様子を見るぐらい許されるではないかと、いかづちは心中で強く訴えた。

「あたごさん、おはようございま――――――」
目の前の光景に、いかづちの言葉は止まった。
いつもの陰の場所に佇んでいたあたごは、その首に巻いた包帯を解き、醜い傷を露にしている所だった。
「な、なにをしているんです……？」
雷のように走った傷。解かれた包帯はぺたんと座りこむあたごの周りに捨てられた。傷からは、じわじわと血が滲み出ていた。
「だ、駄目ですよ。　まだ治っていないんですから、ちゃんと包帯を……」
次の瞬間、いかづちは声にならない悲鳴をあげかけ、無意識のうちに駆け出していた。
あたごが、自分の手に発現させたナイフを自分の首の傷目がけて、刃先を向けたからだ。
思い切りナイフを突き刺せば、首を貫通するのではないかという恐怖観念に駆られる。
艦魂は己を傷つけようが、本体の艦が無事である限り、最悪死ぬことはない。
だが、傷つけるという自体は変わりない。
そして何がどうだろうが、その――自殺行為というものは、決して許してはいけない行為として、止めるべきものだった。
いかづちが、ナイフの刃先を自分の首下に向けたあたごに飛びついた。ナイフは吹き飛び、カラカラと遠い所へと床の上を回っていた。
そしてナイフとは別に床に転がっているのは、あたごといかづちだった。あたごはいかづちに倒されて、仰向けに転がっていた。その上を覆いかぶさるように、いかづちが荒い息を吐いていた。
「はぁ…はぁ……」
「…………」
あたごが咄嗟に掴んだあたごの手首、そして手のひらには、ナイフは消えていた。遠くに飛ばされたナイフは、やがて光の粒となっ

て消えていった。
押し倒したあたごを正面から見据えて、いかづちは叫んだ。
「なにをしているのですかッ！！」
「…………」
いかづちの一喝にも、あたごは全然動じなかった。虚空の瞳は天井を見据えており、いかづちの事などまったく見えていなかった。
そんな瞳を見て、そして悲しくて、あたごは瞳から涙をこぼした。
ぽつ、ぽつと、いかづちの涙があたごの頬に落ちた。

『生まれちゃ、いけなかったんだ――――――？』

昨日の、あたごの言葉が脳裏によみがえる。
「生まれちゃいけないなんて事、あるはずないんですよ……」
いかづちは涙を頬に刻みながら、あたごの胸にぎゅっと拳を握り、自分の顔を近づけた。
仰向けに倒れたあたご。そしてあたごの上で覆いかぶさるように重なり、小さく震えるいかづち。
あたごの頬に、いかづちの落とした涙とは別の涙が、一筋、伝っていた。

その日、『あたご』艦内で事故当時の当直であった海士長が自殺未遂した。それをきっかけに、翌日から上陸を禁止されていた乗員全員に対して、上陸・休暇の外出が許可されることとなった。

第六幕　検証と、冒涜――

衝突事件から約二ヶ月が経った。事故当時の捜査は進むが、その一方で『あたご』に対するマスコミの放送は一方的だった。
事故当時の当直であった海士長の自殺未遂が起こってからも、マスコミの報道は偏向を極めた。
原因がまだはっきりとわからないうちに、自衛隊側への一方的な批難。
対して清徳丸側の行方不明となった父子二名に関しては、遺族の涙ながらに弔うシーンを映し、良い人だったと言う言葉を流すだけで、漁船側にも過失の一因があった可能性は一切報道していなかった。

それは二〇年前のなだしお事件の時と同じだった。
三〇人が犠牲になった海自の潜水艦『なだしお』と遊漁船『第一富士丸』との横須賀沖での衝突事故。当時のマスコミも、裏付けを取らないまま『第一富士丸』の救助された女性乗組員の「波間に浮いて助けを求めている人を自衛隊は助けてくれず、次々に沈んでいった」との証言をそのまま垂れ流したことがあり、その証言は嘘であることが後日判明したが、マスコミは訂正し、謝罪した様子はない。
そんな前例があるからか、「自衛隊を一方的に叩く」という風潮が蔓延し、それを実行しても国民から反感を買うこともなかった。
そしてそれは『あたご』側を大いに苦しめることができたし、実際に彼女自身も壊れるかもしれないほど追いつめられていた。

あたごがいつものように、暗くて陰湿な空間の隅で膝を抱えて丸くなっていた。
そんなあたごのそばには、いかづちが悲しげな瞳を細めていた。
あの、あたごの自殺未遂から、いかづちはあたごのそばに離れず

にいた。またいつ自分を傷つけるような行為に走るかわからないからだ。
艦魂は本体の艦に何かが起こらない限り、死ぬことはない。だが、自分自身を傷つけるという行為自体が、艦魂として許されない事なのだ。
「あたごさん……」
あたごの瞳は遠い目をしていた。じっと隅に膝を抱えて動かない。そんな状態がずっと続いていた。
時よりぶつぶつと謝罪を繰り返したり、震えたり、泣いたり、いかづちはそんなあたごを抱き締めるたびに、彼女が少しずつ壊れていく事に恐怖を覚えていた。
「(ここに、私ではなく、みょうこうさんがいたら……)」
あたごを妹のように愛し、まるで本物の姉妹のように仲が良かったみょうこう。
彼女の母港はあたごと同じ舞鶴で、今はどこにいるかわからないが、少なくとも横須賀にはいなかった。
みょうこうと一緒にいた頃の面影は、目の前にいる彼女には微塵も感じられなかった。

「――――失礼するッ!」

「?!」
突然、溢れんばかりの光が陰湿な空間に差し込むと、女性の声が光から聞こえた。光はすぐにおさまると、二人の少女が現れた。身体は小柄だが、どちらも海上保安庁の制服を着ており、その表情は無愛想な警察官そのものだった。
「海上保安庁の者だ。　あたご殿はどっちの者だ?」
「な、なんですか……あなたたちは」
「我々は第三管区海上保安部に所属する巡視艇の船魂だ。　第三管区本部の意向により、本日十六日午後から衝突事件に関する現場

検証を、事故発生海域である千葉県野島崎沖で行う」

「検証……？」

「事故発生船の事故原因を調べるため、実際に現場海域にて航行させ、事故状況を再現する！」

「な…ッ！？」

いかづちは愕然となった。そんな話は聞いていない。

確かに当時の状況を再現し、検証すれば当時の状況も詳しくわかるだろうし、捜査も大分進むだろう。

だが、今の状態の彼女にそれをやらせるのは、酷な話である。

本当に壊れるのではないか――いかづちは戦慄した。

「そ、そんなの聞いてな――」

「これは決定事項だ。そして、海難審判所において絶対に必要な参考資料になる。部外者は関係ない」

「ぶ、部外者…ッ！？」

「その通りだろう。それとも、貴様はこの者の保護者か何かか？」

「私はただ、仲間が心配なだけです…ッ！　仲間を心配して、そばにいては悪いんですか…ッ！？」

「我々の捜査の邪魔になる範囲に及ぶと悪い」

「――ッ！」

隅に膝を抱えるあたごの前に、立ちふさがるように立ついかづち。

睨みを効かせようとするいかづちだったが、海保の船魂二人はまったく動じていなかった。

「そんなにこの者を行かせたくないのか。ふん…」

その時、海保の船魂の口元がニヤリと歪む。

「何故、貴様が我々の捜査を邪魔するのか。わかったぞ」

「わ、私は別にあなたたちの捜査の邪魔なんか――」

「民間人を殺した罪が明確にバレるのが嫌なのだろう？　自衛隊（あなたたち）は」

「――――！！」

真っ向からいかづちに対する一人が口元を歪めて笑い、もう一人はジッと無言・無表情で、表情を変貌させるいかづちを見詰めていた。

「なんで……すって…？」

「自衛隊はどうしても自分の過ちをひた隠しにしたいんでしょう。小汚い奴らだな」

いかづちの拳が、震える。

その表情は、普段の彼女が滅多にしないものになっていた。

「所詮、貴様らは国民を護ってなんかいない」

敵意をむき出しにした瞳から放たれる視線が、いかづちの瞳を討つ。

「貴様らが護っているのは、“国家”であり、それも幻想にしかないお伽話の中の“国家”だ。逆に貴様らは国民を殺している」

頭が、火のように熱くなっていく。

「戦争ごっこで人を殺すのは、楽しいか？」

思考が、止まる。

「やめて……」

「何も期待されていない、何も存在価値を見いだせてない、貴様ら自衛隊はこの国で存在することを許されないはずのモノ」

「やめなさい……」

「国民を真に護り、海の警備を任されるのが、我らの役目」

「やめろ……」

「貴様ら自衛隊は、いらない――――」

「やめろって……」

「自国民を殺す兵器など、廃棄すべきだ――――」

「――――やめろって言ってるのよッッ！！」

一気に頭に血がのぼり、まるで雷が落ちたかのように体中がビリビリと熱くなる。普段の彼女には考えられない怒号と迫力がそこに顕現されていた。

あまりの迫力に圧倒されそうになる海保の船魂だったが、無理をするように口元を歪ませる。

「ふん、真実を指摘されて逆切れか。　手を出すと、貴様もタダではすまさんぞ」

許せなかった。

冒涜されるのが。

そして何より、あたごの前でそんなことを言うことが、もっと許せなかった。

そっ……

「――――ッ！？」

その時、電流が走ったかのように熱い手に、そっと触れる温もりがあった。

その温もりに振り返ると、あたごの顔が視界に飛び込んできた。熱くなっていた身体が、冷えていった。

「あたご、さん……」

いかづちの手に触れるあたごの温もりは、微弱ながらも、優しさがあった。

ふるふると、首を横に振るあたご。

「……ッ」

ぎゅっと拳を握ったいかづちだったが、あたごの手が触れていることに気付いたかのように、拳は解かれた。

いかづちの身体から、迫力に満ちた怒りのオーラがシュンと消えてしまったみたいだった。

「……ごめんなさい」

「え…っ」

立ち上がり、いかづちのそばを横切る際に、あたごが雫と共にその言葉をいかづちに送っていた。
いかづちのそばから離れ、あたごは海保の船魂たちのほうに歩み寄った。
「……ご迷惑おかけしました。よろしくお願いします…」
ぺこりと頭を下げるあたご。
「ふん…」
一人の海保の船魂は鼻を鳴らすと、「来い」とあたごに投げかけて光の中に消えていった。
そしてもう一人の海保の船魂が、あたごの肩に手をかけた。
「…………」
ジッといかづちの方に目を向けた海保の船魂は、あたごにポツリと呟いた。
「……いい仲間を持ったね」
言い終えると、彼女はあたごの肩に手をかけたまま、転移の光を輝かせ始めた。
光の中に包まれる途中、あたごが呆然と立ついかづちの方に振り返った。
「ごめんなさい、いかづちさん。そして――――」
光の中で、事故が起きて以来、彼女が初めて――――
「――――ありがとう」
笑顔を向けた。瞳に、涙を浮かばせて……
涙を浮かばせて、無理をするように、辛いはずなのに笑顔を向けて言ってくれたものは――――
自分のために怒ってくれた友人への、今までの彼女の想いに対する謝罪とお礼の言葉だった。

第六幕　検証と、冒涜———（後書き）

いかづちキレる…（苦笑
そして海上保安庁の船魂がまんま悪役になってしまいました。なんだか自衛隊と対立する方を書くとまんま悪役っぽくなっちゃいますね～（艦魂防衛白書の在日米軍といい）
そして暴言を吐かせてしまう（笑）
彼女たちは悪い娘じゃないのです。むしろ悪いのは私（ｒｙ

第七幕　贖い

海上自衛隊の護衛艦『あたご』と漁船『清徳丸』の衝突事故は予想以上に尾を引いた。

最近起こっていた自衛隊内の不祥事に続いての事故だったために、『あたご』への非難は火がつく勢いだった。現場検証や当直士官への事情聴取、海難審判所の捜査等が進む中、世間は冷ややかだった。海難審判の捜査で判明した『あたご』側の監視不十分への指摘、乗員への教育不足、隠蔽工作の疑惑、様々な方面からマスコミや国会内でスケープゴートにされた。

規律が正しいのが当然の自衛隊、しかし海上自衛隊では組織の弱体化やモラルの低下が浮き彫りになっていると言われ、海上自衛隊の不祥事を並べ立てての報道、事故発生から半年以上が経っても偏向と言わざるを得ない状態が続いていた。

国民の自衛隊への意識に関わる重大な出来事となり、その懸念は『あたご』のみならず、海自のほとんどの艦に伝染していった。

横須賀港の岸壁に着岸する護衛艦『いかづち』は数ヵ月ぶりに日本へと帰ってきていた。

「…………」

「あ、いかづち〜。おかえりなさいです〜〜――――って、どうしたのですか？」

「はたかぜさん……ただいまです」

溜息を吐くような暗い表情でインド洋からの帰還を果たしたいかづちを迎えたのは、はたかぜ型護衛艦一番艦『はたかぜ』の艦魂、はたかぜだった。

十五か十六ほどの少女。上から下までぴっちりと着た海自の白い制服が華奢な輪郭を表し、ショートヘアの黒髪は制帽の中におさめられている。

「わかりました、遠洋での任務にお疲れなのですね。　お勤め御

苦労さまです。　どうぞ、ごゆっくりお休みください」
「あっ、そうじゃないんです……」
「では、何故元気がないのですか？」
「…………」
護衛艦『いかづち』は『あたご』の事故発生から二ヶ月後の四月に、新テロ特措法の基づき、補給艦『ましゅう』と共にインド洋に派遣されていた。
あの、あたごが現場検証のために海保の船魂と一緒に行ってしまった日から間もなく経った時のことだった。
ずっとあたごのそばで支えていたいかづちだったが、任務のためにやむを得ず、あたごのそばを離れ、遠洋へと出ていた。やっと任務を終えて帰ってきたいかづちだったが……
「…それより、あたごさんは」
日本から遠い外洋にいる間、いかづちはあたごの事が気にかかって仕方なかった。任務に支障が出ない程度には抑えていたが、いざ帰ってみると、真っ先にあたごへの心配が沸き起こった。
そして――
「……ねえ、いかづち」
「なんですか、はたかぜさん……」
「ここに来るまでの間に、みんなに冷たい目で見られなかった？
特に漁船に」
「――――ッ！！」
思いつめていた表情も一変して、いかづちは動揺を隠せずにいた。
はたかぜは案の定という風に溜息を小さく吐いた。
「ここ最近……特にあたごの件以来、行き交う船、特に漁船の視線が痛いですよね～」
「…………」
「いかづちの元気ない理由も、それですよね？　浦賀水道は特に漁船がたくさんいますから」
いかづちが遠洋での任務を終え、長い航海を経て日本に辿りつい

た時。
任務の疲れを背負って祖国への帰還を果たしたいかづちを迎えたのは、漁船の船魂たちの冷たい視線だった。
横須賀港までに入る間に通る浦賀水道は、漁船や貨物船、船の種類問わず、日本一の船舶が多く通過する海域だ。
インド洋派遣任務を終えて浦賀水道を航行していた『いかづち』と『ましゅう』は、突き刺さる多数の冷たい視線を受けながら、入港した。
海上自衛隊の艦というだけで――
「明らかに嫌われていますね、私たち。特に漁船には」
「…………」
『あたご』の事故以来、事故の捜査は順調に進み、報道は真相が明かされるたびにそれを報じた。片方の船にのみ――
「……たとえ嫌われても、それでも国民の皆様を御守りするのが、自衛隊(わたしたち)の役目に変わりありません」
――所詮、貴様らは国民を護ってなんかいない――
――貴様らが護っているのは、"国家"であり、それも幻想にしかないお伽話の中の"国家"だ。逆に貴様らは国民を殺している――
「……ッ！」
初めて自分をあそこまで奮い立たせた言葉を、いかづちは思いだして苦い表情になった。
「……まぁ、あまり外部の事を気にすることはないと私は思いますけどね」
ハッと顔を向けると、はたかぜは真剣かいつものお気楽なのかわからない微妙な表情で呟いていた。
「実際、船舶同士の事故は自衛隊に限ったことじゃない。ただ、私たちが"自衛隊"だから、ただその一点だけなんですよ。簡単な

話」
「……それはそうかもしれませんが」
「もちろん、行方不明になった漁船側の方々や、漁船には、気の毒だと思うし、冥福を祈る思いですよ。　でも……あたごが一方的に悪役になるのはいただけないですねぇ」
「…………」
「公平に審査して、真相を明かして、皆にきちんと説明する。そうすれば自衛隊(わたしたち)も、漁協側も、そして国民にも、本当の意味で真相を教えてくれたら、真の再発防止になると思うんだけどなぁ……」
はたかぜの言うことは、いかづちにとってもまったくその通りだと共感できる感があった。
そして、それだけに……
「……あたごさん」
「可哀想ですね、彼女」
「！」
そよ風が、妙に生温かい風が二人の肌を撫で、髪を揺らした。
「本当に、可哀想……」
はたかぜの悲しいような、憂うような、少し寂しげな声が風に乗っていかづちの耳に届いていた。

その時、『あたご』は既に横須賀港にはいなかった――

九月。
夏も終盤に差し掛かった頃、四国の沖合を護衛艦『あたご』が航行していた。
『あたご』の周りには、不用心に近づく船は一隻もいなかった。
それが、本来の当然の事であった。
だが、『あたご』の監視は例の件もあって、他の艦とはまた違う厳重な監視が行われていた。

時計の針が午前七時に近づこうとしている朝、『あたご』は海と空、周囲の視界がはっきりしてきた朝の風景の中で、静かに白波をたてていた。

事故当時の艦長をはじめとした六名が異動となり、新たに着任した艦長たちが指揮を執る航海。

艦橋付近からそびえ立つマストの上に腰を下ろすあたごは、視界いっぱいに広がる波立つ海面と四国の陸をうっすらとした瞳で眺めていた。

「…………」

あたごは事故が起きた直後からずっと続いていた状態からは一応の脱却をしていた。それは自分を支えてくれたいかづちたちのおかげであるとあたごは理解していたが、まだ以前のような自分にはまだまだ戻れずにいた。

罪の意識は消えるはずもなく、肩が重い。精神はいつも痛んでいて、息苦しい毎日が続くのが日常になっていた。

だが、あたごはそれを仕方がないと当然のように思っていた。これは、自分への罰なのだから――――

「…………」

隅で小さくなり、震え、泣いていた貧弱な自分。そんな自分のそばにはいつも、いかづちがいた。まるで、姉のみょうこうのように――

そして、いかづちの温もりが、いつしか大好きな姉の温もりを思い出させた。

それがまた、心が苦しかった。

姉を思い出し、そのたびに会わせる顔がないと、嘆く。

自分の犯した罪は、全国に知られている。きっと、姉も知っているはずだろう。

姉は自分の犯した罪を知って、どう思っただろうか。悲しんだだろうか、怒っただろうか、失望しただろうか。

そんな思考がぐるぐると回り、ますます心を締め付ける。

必死に庇ってくれた、いかづちの姿。
少し過剰なほどのスキンシップをするものの、本当に自分を大切にしてくれていた姉の姿。
あたごは、二人の姿を重ねて、気付いた。
自分はいつまでも過去に縛られてばかりで、泣いてばかりだと。
それでは、姉やいかづちたちをさらに失望させるだけだし、迷惑をかけるし、そして何より死んでしまった人たちへの贖いもできない。
あたごは、過去に縛られて震えて泣くばかりだった頃を捨てた。
そして、自分の未来を罪滅ぼしのために使おう。
あたごは、苦しかった心の隙間に、その決意を埋め合わせた。
「……ごめんなさい、姉さん。いかづちさん」
頬に伝った雫を、ぐいっと拭う。
「私、贖うよ……」
あたごはマストの上から消えると、一瞬にして甲板に降り立った。
波に揺れる甲板の上で、あたごは手の甲に短刀を顕現させ、ぐっと握った。
そしてそのナイフを自分のポニーテールに突きつけて――――

バサッ。

躊躇なく、綺麗に捌くように、トレードマークだったポニーテールをばっさり切り下ろした。

姉さんが結んでくれた髪型だった……だけど。

切り下ろした髪を握っていた手をゆっくりと開く。手のひらから、潮風に乗って、あたごの髪が海の彼方へと流された。
そして一緒に、結んでいた黄色いリボンも、風に流されて海の中に溶けていった。

「……私」
あたごは、自分の髪が波に呑まれていく海面を見詰め、ポツリと呟いた。
だが、その言葉は波の音に掻き消され、聞こえない。
あたごはピクリと何かを感じ取ると、その場から一瞬にして消え去った。その直後、艦は異様な空気に包まれると、舵を取って通常とは違う動きを始めた。

九月十四日午前六時五十六分、護衛艦『あたご』は豊後水道の領海内で、国籍不明の潜水艦らしい潜望鏡（ペリスコープ）を発見。アクティブソナーによる追尾を実施。同日午前八時四〇分ごろに失探した。

第七幕　贖い（後書き）

もうそろそろこの作品も終わらせようかなと思います。
ちなみにこの作品、自衛隊側は全然悪くないと言っているわけではありませんので。なんだか本文中に感情的な部分も入っちゃってる感もあったりしているかもしれませんが、私はただ、当時一方的に憶測だけで自衛隊を叩いていた状態が許せなくて、公平に扱ってほしかったがために執筆しているわけで。

まぁ、捜査の過程でわかった事は、やはり『あたご』側に大きな過失があったこと。
マスコミの報道では、一〇〇パーセント『あたご』が悪いみたいな言い方でしたが。
勿論、漁船側にも避航動作を取らなかったこと等、過失はあります。亡くなった二名の方は本当に気の毒に思いますし、このような事故が起こったことは本当に残念であり、ご冥福をお祈りするばかりですが……
一方的に『あたご』が悪役にされるのはどうかと。
法律的には、海上衝突予防法の第二節第十七条あたり……かな。『あたご』は避航船、『清徳丸』は保持船となるので……『清徳丸』より『あたご』の方が過失は大きいのは認めますが……
やむを得ない場合を除けば、保持船は避航するための最大限の努力をすることはちゃんと書いてあるんですけどね。それをしなかった『清徳丸』にもやはり過失はあるわけで。
警告の信号も打たなかったみたいだし。
あと、ここで言うのも何ですが、漁船っていっぱいいますから。それを全部避けろというのは大型船にとっては酷な話で……って、これは前も言いましたね。
真っ暗とはいえ、現場の気持ちは実際に経験したことがある身とし

てはわかってしまう（ホントに見えない…）のですが、『清徳丸』の接近を許してしまった『あたご』にも当然過失はあり、そしてそこまで近づいてもなお協力的な避航動作を取らなかったのもいけないことです。

ま、要は……

確かに『あたご』には大きな過失はありました。
だけど『清徳丸』にも過失はあるんです。
そもそも船舶同士の事故において、過失は双方にあるはずなんです。
審判長が述べた本文等の一部引用は、いずれ本作でも記載しますが……

偉そうなこと言ってるかもしれないけど……

どちらも悪かったこと、本当の真相を知ってほしい。ただそれだけなんです。

第八幕　日本と世界の常識・非常識（前書き）

本作では久しぶりの投稿です。
今回は事故から一年が経ち、ようやく海難審判所の裁決が下りました。
そしてそれを受けて、報道する各新聞社の記事内容と、海難審判所の裁決内容の違い。
今回の事故に関しての、浮き彫りになった日本と世界の常識・非常識の差。
それでは、良ければご覧くださいませ。

第八幕　日本と世界の常識・非常識

事故発生から一年が経ち、ようやく海難審判所の裁決が下った。
まず、裁決が下る前に横浜地検が事故当時の当直士官二名への、操船していない人物への異例と言える起訴を行った。
捜査の結果、海難審判所から海上自衛隊・第三護衛隊側に勧告が出された。
これを受け、事故当時の『あたご』艦長の一等海佐は「裁決に厳粛に受け止めたい、組織に勧告されたことは結果的に自分たちにも出されたことだと受け止めている」と記者会見で述べた。
そして海自のトップと言える海上幕僚長は「第三護衛隊に勧告が為されたことは重く受け止めており、再発防止に万全を期したい」と発表した。
要は『あたご』側の監視不十分が主因とし、所属部隊の第三護衛隊に再発防止に努力するよう勧告するという内容だった。個人の責任を問うよりも組織としての責任を問題にしたことで、艦長をはじめとした四人への勧告は見送られた。
各新聞社の新聞の一面には――――

――――衝突、あたごの不注意　海自へ教育勧告――――
社会面――――組織に勧告　戸惑う海自。前艦長　なお「漁船が原因」――――（朝日新聞）

――――衝突　あたご側に主因　海自に安全勧告へ――――
社会面――――海自　基本なおざり。「父と兄　悪くなかった」遺族や仲間　安堵の涙。前艦長　頭下げつつ「漁船に原因」なお持論――――（毎日新聞）

――――海自護衛隊に安全勧告　『監視体制不十分』――――
社会面――――「父と兄正しかった」遺族、安堵と悔しさ――――（読売新聞）

――――海自に組織責任　再発防止へ勧告――――

社会面――「今さら二人は帰ってこない…」遺族　涙と不満――

――（産経新聞）

――――海自に勧告　『あたご』主因――――

社会面――『監視体制の構築不十分』海自の責任　厳しく指弾

――――（日経新聞）

終わりであると国民は認識することとなった。

だが、海難審判所の裁決が下ったことにより、この事故は一応の終わりであると国民は認識することとなった。

――と、このような形で報道された。

あたかも『あたご』が一〇〇パーセント悪いという風に言っているとしか聞こえない内容で、最後まで報じられることとなり、その証拠として漁船側への過失は一切報道されなかった。

横須賀港の在日米軍基地。

近隣諸国の動きに敏感になりつつある東アジアの昨今の情勢下、日本の横須賀基地に置かれる在日米軍第七艦隊はアメリカ国外最大の軍事基地である。

現在のアジア情勢の動きによって、日米同盟の在り方や強化が問われる中、日本に居る世界最強の第七艦隊を率いるのが、彼女、強襲揚陸艦『ブルーリッジ』の艦魂だった。

黙っていれば庭の彫像のように美しく整っていた顔立ちをした、白い肌の金髪がよく似合った美少女なのだが、彼女は日々のストレスが溜まり、いつも機嫌が悪かったり性格が少々荒くなったりしてしまうのが常だった。

そんなブルーリッジは第七艦隊の旗艦として、いつものように忙しい生活を送っていた。そんな仕事の合間に、彼女はとある自衛隊内の関連した事件の報告書を見つけ、思わず失笑していた。

「……どうかしたのですか？　ミス・ブルーリッジ」

ブルーリッジの近くで、水兵如きが座れそうにない椅子に腰を下

ろし、優雅にブラックコーヒーを口に運んでいる黒いドレスを纏った貴婦人のような女性は、インド洋で予定されている演習のために横須賀港に寄港した空母『ジョージワシントン』の艦魂だ。

「……いえ、相変わらずこの国は異質だなと思いまして」

「……？」

ブルーリッジが目を通していた報告書を差し出す。それを受け取ったジョージワシントンがそれを見ると同時に、ブルーリッジが口を開く。

「例の自衛隊と漁船の衝突事故の件ですよ。どうやら海難審判の裁決が下ったみたいです。まぁ、予想通りすぎるといいますか、自衛隊に非があったということで決着したみたいです」

「…え？　でもこの報告書には、それだけとしては決して書かれてないわよ。ちゃんと漁船側の過失もここに書いてあるじゃない。ほら、“本件衝突は、『あたご』が動静監視不十分で、前路を左方に横切る清徳丸の進路を避けなかったことによって発生したが、『清徳丸』が、警告信号を行わず、衝突を避けるための協力動作をとらなかったことも一因をなすものである”って。確かに重大な過失は自衛隊側にあるけど、一〇〇パーセントってわけでは……第一、船舶同士の事故にどちらかが一〇〇パーセント悪いだなんて、絶対にありえないんだから」

「その通りです。ですが、日本の新聞を読みましたか？」

「一応、この国の現状をよく知るための情報収集の材料の一つとしては利用しているわよ」

「私も糞忙しい中、その一環として日本の新聞は目に通します。しかし報告書と見比べてみるといつも面白いと気付かされますよ」

「…どういうこと？」

ブルーリッジは可笑しいと言いたげに、面白そうにくくっと喉を鳴らす。

「日本国民が気の毒だな、っていうこと」

「……それは言い過ぎでは」

「あくまで私たちの国から見ればの話ですよ」
そもそも、このような事故がここまで大きく、長く報道され続け、ましてや政争の具にされることなど、ブルーリッジたちの祖国アメリカでは考えられないことだった。
この『あたご』と漁船の衝突事故は一時、国会議員が地元会合等で発言したことがあるが、そのような、政治の所まで持っていくことは日本国外から見れば非常識なこと。
特にアメリカは国益を第一に考えている国だから、尚更政争の具にならないよう与野党が一丸となって対処に乗り出すだろう。
「この『アタゴ』という艦も気の毒ですね。日本の自衛隊はどれだけ嫌われていることやら」
「でも、この艦に主因がある、もしくは重大な過失があるのは海難審判の言う通りだと思うわ。もちろん、漁船側にも過失はあったし、双方とも過失はあったということね」
「そもそも、軍艦と民間の漁船が事故を起こすということ自体が可笑しいことですけどね。軍艦を優先して、民間船が避けるのが国際社会の常識ですから」
「……日本は、難しい国だから」
ジョージワシントンはまるで言及を控えるように、静かにコーヒーカップを口に付けた。
確かに、領海内で軍隊に所属する艦に優先航行権が与えられるのは世界の常識である。
日本国内では、自衛隊は軍隊ではないとしているが、それは日本だけが言っているに過ぎない。
世界から見れば、そんな日本の性質を理解する国などなかった。
そして、一般的に大型船は舵の効きが遅いので、小型船が退避することは法律でも決まっている。
「本当に、この国は可笑しいですね」
そう言って、ブルーリッジはくくくと喉を鳴らし続けた。
ジョージワシントンは黙って、コーヒーを飲むだけだった。

日本国内で起こった海上自衛隊の護衛艦と民間の漁船との衝突事故。それは外の国から見れば、最後の最後まで異質なものであった。

春の息吹は、海にすれば生温い。
そして春の匂いでもなく、微かに漂う潮の香りより、鉄や煙の匂いが少し強く、風に乗ってくる。
貨物船や漁船が近くを通りかかる航路の上を、護衛艦『みょうこう』が停泊港となる横須賀港に向かっていた。
現在、『みょうこう』は春から乗艦した新人クルーたちの訓練のために、日本各地をまわっていた。
そして、次の停泊港は横須賀だった。久しぶりの、横須賀だった。
行き交う船舶の数が増えていくのがわかる。日本で最も船舶が行き交う航路、浦賀水道が目前に迫っているからだ。
もちろん、すれ違うタンカーや貨物船だけでなく、小さい漁船が何隻もいる。
周りを行き交う大型船から見れば遥かに小さく、頼りない姿ではあるが、その小さな身で必死に日本人の食生活を支える漁業をこなしているのだ。大型船とはまた違って、その小さな身体だからこそ、時には自分に比する近さ、あるいは重い量の漁獲を精一杯行っている。

小さな漁船が一隻、『みょうこう』の近くを横切る。
その光景を前甲板から見詰めていた、大人のお姉さんっぽい雰囲気を持つ彼女は、漁船から小さな少女が手を振っているのを見ると、どこからか子供らしい笑顔を振りまいて、手を振り返した。
漁船は船首を上下に揺らし、まるで踊っているかのようだった。あるいは、『みょうこう』に手を振っているようにも見えなくもない。漁船は見る間に高速で、白波を残して遠ざかっていった。彼女は小さくなっていく漁船の背中を見送ると、自分も目的地の方へと視線を戻した。
彼女には目的があった。それは大切で、絶対に達成しなければばい

けないもの。
「……待っててね、あーちゃん」
彼女は一年ぶりとなる名を口元から紡ぎ、微かに綻ばせ、胸の前できゅっと手を握った。
周囲の船舶とは際立って目立つ、イージス護衛艦『みょうこう』が白波を立てながら、一路、横須賀港に艦首を向けて航行していた。

第八幕　日本と世界の常識・非常識（後書き）

次回か次々回あたりで最終回の予定です。なんでこんなにアバウトかと言うと、実際自分でもまだよくわからないからです。ごめんなさい……

今回の衝突事故でもそうですが、色々と難しい事情を抱える日本だからこその事件かもしれませんね。

それでは、また次回。

第九幕　姉と妹

日本古来から軍港としての伝統を色濃く残す横須賀港には、最近になって海難審判の判決を終えたイージス艦『あたご』の停泊する姿があった。
　事件当時は、常に全国に中継されるカメラの視線が彼女に浴びせられていたが、今となってはあっけないものだった。まるで反動のように、気のせいかむしろ寂しく見えてしまう。
　ぽつんと停泊する一隻のイージス艦。周りにも他の停泊する艦はあるのだが、彼女が一人だけ、寂しく佇んでいるかのようだ。
　地の上に咲き起こる桜吹雪は、春の訪れを教えてくれる。しかし、彼女には関係なかった。
　地上の桜に関心が向かず、ただ、海の方を見詰める毎日だ。
　それが、あたごの日課だった。
「ずっと、海を見ているの？」
　澄んでいた心が突然、膨れ上がる水面のように湧きあがり、彼女を振り向かせた。丸くしたあたごの瞳に映るのは、一年ぶりの懐かしい姉の姿だった。
「みょうこう……姉さん…？」
「久しぶりっ。　あーちゃん」
　一年前とまったく変わらない雰囲気で、首を傾げてニコリと笑うみょうこう。
　歩み寄るみょうこうを、驚愕した表情で見詰めるしかないあたご。
　だが――――
「――――駄目ッ！」
　あたごの声が、みょうこうの足を止めた。
　振り絞ったあたごの声に、みょうこうは特に驚きもせず、冷静に立ち止まっている。
　対して、あたごは胸をおさえ、ぷっくらと汗を浮かばせていた。

「……姉さん、なんで……」
なんで、こんな私の前に現れてくれたの。
こんな、汚れてしまった私の前に。
「勿論、可愛い妹に会いたかったからよ」
首を傾げて指を頬に当てたみょうこうは変わらず、愛想の良い、にっこりとした笑顔で答えた。
「…………」
「一年ぶりねぇ、あーちゃん。私みたいに変わってないだろうなと思っていたけど……変わっちゃったね」
あたごはビクリと震える。
そして、神経が後頭部に集中する。あたごの特徴的だったポニーテールは、面影もない。ばっさりと切り落とされ、ショートになった頭がやけに痛く感じた。
「……残念ねぇ。あーちゃんのポニーテール、とっても可愛かったのになぁ」
「…………」
みょうこうは頬に手を当て、残念そうに溜息を吐く。だが、それも普段の姉と変わらないものであった。
「……なんで髪、切っちゃったの？」
「……ッ」
思わず下唇を噛んだあたごは、ぎゅっと拳を握った。そして、顔を上げると、目の前には真剣な眼差しで見詰めるみょうこうの姿があった。
「……これが、私のケジメだから」
「ケジメ……？」
「私、もう以前の私じゃありませんよ……みょうこう姉さんの、妹ではありません……」
「何言ってるのよ、あーちゃん。あなたは私の妹よ」
「……いいえ。姉さんの妹は、罪人なんかじゃありません……」

「私の妹分レーダーがびんびん反応してるんだから、間違いないわ。　髪を切っていようが、どこかが変わっていようが、あーちゃんはあーちゃん。　私の妹よ」
「違う……ッ！！」
意外と大きく響くあたごの声に、みょうこうの口が閉まる。
あたごは、震えながら自分を抱き締める。みょうこうの視線が痛くてたまらず、顔を俯ける。どうしても姉を直視なんかできなかった。
こんなにまで、自分は変わってしまっていた。
目の前の姉は、全然変わっていないのに。
どんな顔で、姉と会えば良いのか。前科を背負った自分に、姉と会う資格なんてない。あたごは当然であるかのように、ずっとそう考えていた。罪を負い、己の一部を捨てた自分なんか、以前のような幸せを得ることなど許されない。
「私は……他人を殺した罪人です…ッ！　そんな私が、姉さんと会う資格なんて……」
「……罪人とか、資格とか、変なことを言うのね。あーちゃん」
「あーちゃんって、呼ばないでください…ッ！　私は……もう…」
「あーちゃんは、あーちゃんだって」
みょうこうの優しい声が、どこまでもあたごに染みわたる。それが、あたごにとっては苦しく、そして暖かった。
「あーちゃんは、何も悪くないのに罪人なの？」
「わ、私は人を殺したんですよッ！？　それが、罪人以外に何があるんですかッ！」
あたごはカッとなってみょうこうに叫ぶ。目からは涙が溢れ、顔は真っ赤になっているだろう。だが、あたごは自分の顔がどんなことになっているのかどうでも良く、構わないままに叫び続ける。
「私、何の罪もない人たちをこの手で殺してしまった…ッ！　同じ存在であるはずの彼女を、そして彼女に乗っていた人の命までッ！　私の罪は、誰にも許せるはずがないものなんです……ッ！！」

あの冷たい夜で、あの闇の中で、自分は他人を、冬の冷たい真っ暗な海の底へと沈めてしまった。
きっと彼らは、苦しみ、自分を恨みながら逝ったに違いない。
自分の思った通り、世界は自分に罪を問い、罰を投げた。重大な罪を、十字架として背負う艦生を過ごすことになったのは、当然のことだと思う。
だから、自分の罪は絶対に許せるものではないし、消えるものではない。過去に犯した自分の罪は、未来永劫残される。そして、その罪に対して償わなければいけないのだ。
「あーちゃんは、罪人なんかじゃないわよ」
当たり前のように、みょうこうはサラリと言って見せた。
「実際に言っちゃえば、あれは人である乗員の見張り不十分が原因だし、あーちゃん自身に問題はなかったはずよ。それに、過失なら向こうにもあったし、まとめれば不幸な事故だったってことよ」
「そ、そんな簡単に……ッ！」
「だって、実際そうだもの。特に、あーちゃんがそこまで苦しむ必要はないわよ」
「違う…ッ！　違う違う…ッ！！」
「何が違うの？」
「違います…ッ！　姉さんは、私の気持ちなんて知らないから、そんなことが言えるんです……ッ！！」
ここまで姉に気持ちをぶつけるのは、初めてのことかもしれない。そしてこんなに心が嵐のように荒れ狂うと、もうどうしようもない。おさまる気配が自分でもわからない。
「姉さんなんて――――！」
「まだ姉さんって呼んでくれるのね」
「――――！！」
あたごの暴風のように荒れ狂っていた心が、ピタリと静まった。
シンと静まった空気の中、ゆっくりと顔を上げたあたごの視線の先には、みょうこうのお姉さんそのものの、優しい微笑があった。

「許すわ」
「……は？」
一瞬、みょうこうの言っていることが、あたごには理解できなかった。
「だから、私が許す」
「何を言ってるんですか、姉さ……」
次の瞬間、あたごは柔らかくて暖かい感触に顔を包まれた。
みょうこうに抱き締められ、顔を胸の中に埋めたあたごの動きが、止まった。
そして、不思議で澄んだような、静寂が支配する。
「……姉さ……ん……」
「自分で私の妹じゃないなんて言っておきながら……まだまだ姉さんって呼んでくれてるじゃないの」
「…………」
埋める顔を覆うような、暖かさ。それは全身を溶かしてくれるような、清楚な柔らかさだった。
「私が、許す。　だから、もうこれ以上、苦しまなくてもいいのよ」
豊満に溢れる胸の中に、妹（あたご）の顔を埋め、頭をそっと撫でる姉（みょうこう）。そしてその言葉は、あたごが最も欲しかった言葉であり、そしてその温もりもまた同じだった。本当に欲しかったものが、あたごのもとにあった。
「世界がなんて言おうが、私一人でも、あーちゃんを許す。　あーちゃんは、あーちゃんだということを、私が認めるわ」
「…………」
「あなたは、いつまでも私の大切な妹なんだから」
「みょう……こう……姉さん……ッッ！！」
その時、あたごはみょうこうの胸の中から、ありったけの声量で泣き叫んだ。
どこまでも響き渡るあたごの泣き声は、籠の檻から解放された鳥

のように、果てしない空へと飛びあがる。

鎖が切れ、重いものが取り外されたみたいに、あたごは解放的なままに、思いのたけに泣き喚く。

そしてそんな妹を、姉であるみょうこうが優しく、抱き締めて包んでいる。そっと頭を撫でる姿は、姉そのままの姿だった。

世界は彼女に罪を背負わせた。だが、たった一人の存在が彼女を許した時、彼女は解放された。

彼女には確かに、未だに見えない十字架があるのかもしれない。だが、彼女以外の存在はそんな見えないモノなど、まったく気にしない。それどころが、その見えないモノを認めず、彼女の存在だけを認めた。

少なくとも、呪縛に呪われたように閉塞的だった彼女（あたご）の心は、暖かさに引き上げられ、解放された。

彼女にはこれからも色んな日々が待っている。苦しいこともあるだろう。だが、楽しいこともきっとある。そして、彼女一人だけではない。彼女のそばには、誰かがいることになるだろう。

そしてその中で最もかけがえのない存在が、姉のみょうこうであることは、疑いもしない。

一年の呪縛に縛られていた彼女は、一人の姉に、手を引かれた――――

第九幕　姉と妹（後書き）

やはり、あたごを解放したのはたった一人の姉であるみょうこうでした。
この時のために、みょうこうという存在は必要でした。登場当時は妹分補給とか言っていたみょうこうでしたが、彼女は本当に妹であるあたごが大好きな女性なのです。

次回で遂にこの作品も終了の予定です。
ここまでお読み頂いた方々には感謝するばかりです。
それでは、最後の時までお付き合いください。

第十幕　十字架を背負う彼女（前書き）

遂に今回で最終話です。

第十幕　十字架を背負う彼女

久しぶりにみょうこうと出会い、そして彼女の温もりに触れ、解放されたあたごは、ずっとみょうこうに寄り添っていた。
三角座りしたみょうこうに寄り添い、ぼうっとするあたご。そして、慈愛に満ちた表情であたごの頭をそっと撫で続けるみょうこう。端から見れば、微笑ましい光景である。
「……みょうこう姉さん」
「ん？　なぁに、あーちゃん」
みょうこうは普段と変わらない雰囲気で、もしくは普段以上の優しさで、呼びかけに答える。
「……ありがと、ね」
「お礼なんて言われるまでもないわよ」
「……そして、ごめんなさい」
「謝ることもなし」
だが、時にその優しさが胸に痛いこともあるけど、嬉しい。
みょうこう姉さんは、やっぱり優しかった。
「あーちゃんはあーちゃん。　私の中ではずっと変わらない」
「うん……」
こんなに優しい姉がいるなんて、自分は幸せ者だ。
だが、罪を背負った自分が、こんなに幸せで良いのだろうか。不安で仕方がなかった。
あたごは、やっぱりこのまま姉の優しさばかりに甘えては駄目だと、強く思った。
「……姉さん、聞いてください」
「…なに？」
みょうこうは静かにあたごの言葉を待つ。あたごは、真剣な表情で口を開いた。
「私は、いけないことをしてしまいました。　決して許されない

ことです」
「あーちゃん……」
「でも、さっき姉さんに言われて、少し心が軽くなりました。姉さんには本当に感謝しています」
お礼はいらないと言われた。だが、姉には感謝しても仕切れない。
「私は、これからもこの艦生を、姉さんや、そして日本のために全て捧げようと思います。……ううん、元からそういう艦生なのはわかっています。でも、私は更なる自覚を持って、生きていこうと思います」
「…………」
「私は、死ぬまで十字架を背負って生きることになります。だから、私は……」
「もういいのよ、あーちゃん」
「え……」
ふわりと、あたごを自分の胸に寄せ付けるみょうこう。とても柔らかくて、暖かい、良い香りがする姉の胸に、あたごの顔が触れる。
「とりあえず今日は、私のそばでゆっくり休みなさい。ねっ」
「……は、はい」
また、涙が溢れそうになった。だが、あたごはそれを隠すように、みょうこうの胸の中に自らの顔を押し付ける。
ぐず、と音が聞こえるが、みょうこうは聞こえないフリをして、あたごの頭をまた撫でた。
今日は、夜が更けるまでずっと、久しぶりに再会した二人の姉妹がいつまでも寄り添っていた。

気がつけば、一年の月日が流れていた。
あたごがたった一人の姉であるみょうこうに、絶望の淵から手を引かれた時、衝突事故から一年が経過していた。
長らくあたごを蝕んで、十字架を背負わせた事故は、国民の記憶

には既に薄れたものとなっていた。
しかし、国民に『あたご』の記憶を思い出させるきっかけが起こった。

平成二十一（二〇〇九）年一〇月二十七日午後八時ごろ、関門海峡において護衛艦『くらま』と韓国籍のコンテナ船『カリナスター』が衝突するという海難事故が発生した。

衝突当初、マスコミ各報道社は艦首部分が炎上する『くらま』の映像を速報で流し、事の経緯を報道した。しかし、その報道もまた『あたご』事件を再び思わせるようなものであった。
自衛隊所属の艦船と韓国の民間船が衝突したと知ると、マスコミはまず、護衛艦側の責任追及に向ける報道を行い、大した知識も持て合わせていない評論家を出しては、護衛艦側に責任の色を浮かばせるような報道を国民に見せつけた。
日本政府も、まだ護衛艦側に責任があると判明されていないにも関わらず、当時の防衛相が陳謝するという異例の素早い記者会見を行う。
しかし、事故発生から二日後、調査の結果、自衛隊でも海保でもなく、韓国籍のコンテナ船側が事故の主因であることが発覚。
今まで護衛艦側に責任を追及していたマスコミの報道はぱたと報道を取り止めていた。

更に、原因が韓国籍コンテナ船側にあると判明されたにも関わらず、とある労組と政党が自衛隊に対して謝罪や原因究明を申し入れた。
そんなニュースを見つけ、新聞に怪訝な表情を向けるのは、被害者である護衛艦と同じ立場の艦魂たち。
「……日本国民の生命・財産を護る護衛艦と他国、どっちが大事なんだ？」

「そりゃあ、これを見れば聞くまでもないでしょう」
明らかに護衛艦『くらま』が被害者なのに、この労組と政党は海自に対して謝罪と原因究明の要求を出したのか、それだけで彼らの中にある自分たちがどのように扱われているのかがわかる。
しかも、政権交代を果たした時の首相は「日韓関係にいささかでも差し障りがあるようなことにならないようなことが大事だ」と報道曰く慎重らしい対応を指示。
――日本国民の血税で生まれた貴重な護衛艦が、韓国のコンテナ船の操船ミスによって傷つけられたのに、自国と国民を護る盾よりご近所のご機嫌を優先するのは、何事か――
日本全国の艦魂は、ある者はそれを思い、ある者は呆れて言葉も出なかった。

そして――

「昨年二月に起こった『あたご』の衝突事故の教訓が生かされていない」
海自側に謝罪と原因究明を要求した政党の戯言である。
この国は、特殊である。
如何なる方面においてもそれは言えたが、特にこのような事態においては、誰もがそう思えた。

これからも、何らかの不幸な事故が起きてしまえば、同じようなことが繰り返されるだろう。
真の再発防止は意味を為さず。
そしてまた、“『あたご』の教訓”が表沙汰にされる。
彼女は、そうしてずっと、十字架を背負い続ける。

しかしあたごは、もう絶望には負けない。みょうこうという姉に手を引かれたおかげで、あたごはこれからも十字架を背負って、強く生きることを誓った。

たとえこれから何度も世間や罪の意識が襲おうと、すべて受け止める覚悟を持った。

それが、彼女の役目だから。

「私は、護衛艦。　護る艦。　だから、どれだけ嫌われても、私は護るものを護るだけ」

最近になって再び不安定になった東アジア情勢。

北朝鮮の自称人工衛星打ち上げに、日本をはじめとした関係諸国は危機感を露にし、関係各国の全軍は厳戒態勢に入っていた。

そして、勿論ミサイル防衛を想定された貴重なイージス艦も……自衛隊は、護衛艦はどの時代でも認められない存在。

だが、彼女たちを理解してくれる者だっていることを、知っている。

そして、自分を理解してくれる、理解してくれない者、そんな人たちを護ることも、自衛隊としての、護衛艦としての使命。

「私は、あたご。　愛宕の名を受け継がれし防人の魂」

今日もまた、彼女は海の上を翔ける。

荒々しい波を跳ね除け、勇猛果敢に進む『あたご』の姿は、日本国民の貴重な財産である一隻のイージス艦であった。

不幸にも護るべき対象の命を失くし、重い十字架を背負うことになった護衛艦。

だが、十字架を背負っても、彼女の使命は変わらない。

護衛艦。

それは、日本国民の生命・財産を護る、艦（フネ）のことである。

第十幕　十字架を背負う彼女（後書き）

……あれ、なんか微妙な終わり方だった気がする。
ごめんなさい、中々納得のいきそうな終わり方が思いつかなかったもので（涙

とりあえずこのあたごの作品は無事に完結することができました。
これもここまで読んでくださった方々のおかげです。どうもありがとうございました。
当初は『あたご』の事件に対するマスコミの報道のやり方が以前から気に入らなかったこともあって、いつか真実を伝えれば良いなと思い、遂に筆を取った感じでした。
船舶関連の法律に関して未熟だったり、その上駄文なために、上手く伝えられたかどうかは自信ありませんが……
とにかく、自分なりに頑張ったつもりです。
マスコミが当時報道していた内容とは違う真実を伝えられたら良いなと思います。

しかし……悲しいことですが、元々船舶間の事故は珍しくはないんですけどね。
それに、自衛隊の艦船が事故を一〇〇パーセント起こさないというのは、無理な話ですが…
この作品を書いていて感じたことは、自衛隊がどれだけ嫌われているのか、そして日本は世界に比べてどれだけ非常識なのか、痛感できる経験でした。

そして、沈没され、行方不明になられた漁船乗組員二名に対しても、深くご冥福をお祈り致します……

あの事故は本当に悲しい、不幸な事故でした。
海難事故というのは、何に関しても恐ろしいものです。真の再発防止に繋がればそれに越したことはありません。

これからもこのような事故は起きるかもしれません。
ですが、再発防止に力が注がれることを切に願うばかりです。

それでは、ここまでのご愛読ありがとうございました。
これからも伊東と、他の作品もどうかよろしくお願いします。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5282j/

十字架を背負う

2010年10月9日20時18分発行

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。